魔法少女リリカルなのは～転生者はどうしても原作に巻き込まれる様です。～

ガウェイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～転生者はどうしても原作に巻き込まれる様です。～

【Ｎコード】
Ｎ６０７５Ｔ

【作者名】
ガウェイン

【あらすじ】
死ぬべき時に死んだ男が神に気に入られて能力を貰い異世界に行く様です。男は傍観者を装っていますが、やはりそこは転生者。どうしても原作に巻き込まれる様です。

この作品は、作者の処女作です。文才皆無・誤字・脱字などミスが多々あります。そんな作品でも、と言う方は是非見てって下さい。

プロローグ（前書き）

あらすじでも述べたようにこの作品は処女作です。駄文になる為おかしな点があると思います。そんな作品でも、良ければ見て行って下さい。

プロローグ

「ここはどこだ？」

俺は気が付けば真っ白な空間にいた。

「おお！兄ちゃん気が付いたか！おい、コッチだコッチ」

？俺は声が聞こえた方に視線を向けた。・・・・・・

そこに居たのは金髪でオールバック。耳にはピアスを3個ぐらいつけた、俺と同じ位の青年、だが如何にもそっち系の人が立っていた。

「オイオイそれは、ちとひでぇで？」

あれ？俺今声出した？まぁいい。今大事なのは、ココが何処なのかそれだけだ。

「お？やっとココが何処だか気になったのか？」

あれ？やっぱりというかなんと言うか、声に出した？

「ココはだな。至極簡単、単純明快に説明するならば死後の世界、黄泉の国とでも言いますか？うん。そんな感じだ」

ふむふむ、つまり、早い話が俺は死んだと言うわけか。うん。了解。

「えっ！？そんな簡単に死を受け入れんの？お前ってアホなの？バカなの？」

「お前は何か勘違いをしている。俺は俺、お前はお前。唯それだけだ。お前の考えを押し付けるな。それと俺はアホでもバカでも無い」

うん。俺いい事言った！

「ふっ、ふはははははははははははは。……はぁ、はぁ。いや、お前いい！良いぞ！気に入ったぞ！神の一人である俺にそのようなこと言うとは！」

うん？何か今聞き捨てならない言葉が出て来たな。

「なぁ、今なんて言った？」

「あ？今？えぇ～と。気に入ったぞ！」

「違う！その後だ！」

「その後？神の一人であるおｒ「それだ！それ！お前って神様だったの！？」あれ？言ってなかった？」

こっこいつ、ふざけてんのか？

「う～ん。まぁいいか。それよりも早く要件を済まそうか」

「いや、良くねぇんですけど。・・・はぁ、まぁいい。早くその要件とやらを済ましてくれ」

全く俺はとっとと成仏して、寝たいんですよ。

「それは残念ながら無理だな。なんたってお前はコレから俺が転生

をさせてやるんだからな」

・・・・・・は？こいつ今なんて言った？転生？転生ってあれか？別の世界に行くとか言う2次小説などで良くあるあれだよな？

「そう、それだ。その認識で間違ってねぇぜ。ちなみに言っとくと、俺は別に書類整理をミスったりは全くして無いからなそれだけは知っといてくれ」

？どう言う事だ？じゃぁ、俺はあの時に死ぬべき人間だったのか。

「そう。お前は死ぬべき時に死んだ、そして俺は丁度暇になったからお前をここに呼んだ。それだけだ。そして、それは大正解だ。俺はこんなに面白い人間に会えたんだからな」

「それは褒めてんのか？まぁいい。それで、転生の際俺は能力をくれるのか？」

これは大事だ。別に原作に介入する気は無いが、巻き込まれた時に自分自身の身を自分で守れる様にしておきたいからな。

「おお。勿論だ。俺もお前が簡単に死んでしまったら悲しいからな。能力は４つかな？」

４つ……

「だぁーーーーー、思いつかねーよ！」

「オイオイ、どうすんだ？能力無しでも行けるぜ？能力はあくまで、オプションだ。気にする事はねぇぜ？」

いや、それだけはダメだ。危険な世界なら俺が死んじまう。あれ？

「なぁ、俺が行く世界ってどんな世界なんだ？その世界によって能力は変わるぞ？」

そう。コレはまぁ普通に考えて学園生活メインの世界で戦闘用の能力はいら無いだろ？

「ふむ、確かにそうだな。ならば少しお前の行く世界を教えようか。お前の行く世界は戦闘がメインで魔法が存在するからよろしく」

戦闘がメイン？魔法が存在？

何だよその死亡フラグが立ちそうな世界は。だったら、能力はチートで良いか、自重なんてしなくて良い。

「・・・・・・そうだ！良い事思いついたぜ」

わ、我ながら自分がこわいぜ。こんな事を思いついたのだから

「何だ？言ってみろ。たいていの事は叶えてやれるぞ」

「俺が希望する能力は・・・・・自分で能力を創れる能力だ！」

ふふ、我ながら完璧だ。そう。今能力を考えられ無いなら後で考えて作れば良いのでは？って事。

「はは、ふはははははははは。いい、やはりお前は良いぞ！しかし、それは制限をかける事になるぞ？」

「制限？なんで？」

「簡単だ。それではつまらんでは無いか。よってその能力は４回が限界にしておく。考えて使えよ」

「はぁ、まぁいいか。さて、それで？まだなんか有るの？俺は早く行きたくて仕方ないんだが」

何だか体がウズウズして来たんだよ。早く行かせてくれって。

「まぁ、そう焦るな。コレからだ」

パチンッ！

神が指を鳴らしたら神の後ろに扉が現れた。

「さて、あの扉をくぐれば異世界だ。さて、最終警告だ。あの扉をくぐればお前には理不尽な事や、面倒ごとが待っている。それの結果死ぬ可能性もある。それでも行くか？」

はっ！今更なに行ってんだ？俺はどんな事が起きようがそれでいい、俺は

「自分の生きたいように生きるぜ！」

俺は神の横を通り扉のノブに手をかけた

「有難うな、神様。んじゃぁいって来ます！」

俺は扉を開きくぐった。

そこで、意識を失った。

神ＳＩＤＥ

行ったか。本当に奴は面白かったぜ。”自分の生きたいように生きるぜ！”か、ふふふコレから大変な事が起こるとも知らずにまぁせっかくだ。現実の大変さ。醜さを見ろ。

「あっ！奴に言うのを忘れちまったぜ。あの世界には奴がいる事を

まっ、いいか」

プロローグ（後書き）

如何だったでしょうか。

誤字・脱字おかしな点がありましたら、報告して下さい。

感想お待ちしています。

第一話にして、心が折れそうです。

パチッ、パチッ

「知らない天井だ・・・・」

やぁ、みんな我等が豊倉沙英さんですよ。
えっ！？いきなりどうしたかって？そーいえば。まだ、画面の向う側あなた達に自己紹介をして無かったの思い出したからね。唯それだけです。

まぁ、状況ははこんなかんじ
←
目を覚ますと俺は部屋の中に居た。部屋は辺り白を基調としていて、テーブルは黒でカーテンは青。なんだ？この配色は。適当だな、まぁ部屋を貰えたんだから文句は無いが。

「さて、ここがどんな世界かを調べなくちゃいけないんだよな。ふむ、ちょっくら出かけるか」

？俺はテーブルの上に置いてある紙を見つけた
その紙にはこう書かれて居た

『この紙を見ていると言う事は無事に転生出来た様だな。
まぁまずはその世界は死亡フラグはあまり立たないはずだ・・・・・・多分。
まぁそれは置いといて、お前の小学校はその物語の主人公と一緒に

しておいたぞ。あぁ、戸籍はあたり前の様に作っておいたから。
後、金は適当に入れといたから勝手に使ってな？

P．S．クローゼットの中を見て見な面白い物が入ってるぜ。』

うん。色々とツッコミたいです
何多分て、つーかやっぱり死亡フラグ立つんじゃねーか！それに小学校て・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「俺からだ縮んでんじゃねーかー！！！！
何がしてーんだよ！何で体縮んでんだよ！！
くそっ、鬱だ、死のう。

くっ、流石に生き返ったばかりなのに流石に死ね無いな。」

小学校って事はなんだ？何の物語だ？つーか小学校で死亡フラグって、どんだけだよこの世界は！？ハァ、まぁいいかとっとと外に出てここがどんな世界なのか調べなきゃな。

あっ！そうだその前にやる事があったな。

さて、てな訳で、クローゼットの前に来ています。
えっ？なんでかって？ほら、あの神が面白い物が入ってるぜとかほざいてたから、来たわけよ。どんな物が入ってるのか気になって来たわけです。

「さて、ではオープン！」

ガチャ

？中に入ってたのは黒っぽい外套だった。

「これって、確かあの灼眼の女の子が持ってた物だよな？」

まさか、これが神の言っていた面白い物？

確かに、面白い物だが・・・・・・・・・・

まっ！いっか。有ればそれで良し！なくて困るっちゅうこたぁねぇんだから。

・・・・・・・そう言えば、何が入ってんだ？確かコレってあの青い自称猫のロボットが持ってるポケットと同じ機能を持ってたよな？

ガサガサ

パシッ

ん？何か紙見たいな感触のもんを掴んだか、はて？何なのやら

それを取り出してみると、紙でした。……

イヤイヤイヤ！

あれ？コレってあの刀が入ってたりするんじゃなかった？それに紙？あれ？何か書かれてるし

どれどれ？

『言い忘れたかとがあってな？コレは唯の夜笠じゃぁねんだ。コレ

はお前が念じた物をなんでも取り出せるという魔改造品だ。まっ、生物は無理だけどな。それとお前のデバイスもこの中に入ってるんで』

……何て言うか、能力もチートなのにこんな物まで寄越して何がしたいんだ？俺に必ず原作に介入しろと？

うん？デバイス？

デバイス・魔法・小学校・・・・・・・・・・・！？

オイオイ、勘弁してくれよ。何でこの世界なの？せめて、薬味君の世界にしてくれよ。あの世界は関わらなければ全くの無関係でいられたのに、この世界、しかも学校が同じってはぁ、鬱だ。

俺これからどうすればいいんだろうか。

俺の目標の傍観者していられるんだろうか。

心配だ。はぁ

第一話にして、心が折れそうです。（後書き）

感想、誤字脱字、報告報告お願いします。

第二話にして、能力の使い方がわかるようです。（前書き）

まだまだ、未熟者ですが読んで頂き有難うございます

第二話にして、能力の使い方がわかるようです。

はい、皆さんこんにちは

えぇと只今全力疾走をしています。なぜかと言うと回想にいってみましょう。

～回想～

はぁ、まぁいいか。それよりもこれからなにするか。ぶっちゃけ、世界が分かったから出歩く気がなくなって来たからな。

「（別にお前の事をどうこう言うつもりはないが、今日からだぞ？学校）」

頭の中に響いて来た声はあの白い空間にいたあの男の声だった。いや、今はそんな事どうでもいい。今日から？何が？

「（だーかーらー学校だよ。が・っ・こ・う。今すぐ出ねーと間にあわねぇーぞ？）」

「はぁ！？早く行ってくれよ。初日から遅刻なんてそんな面倒かつ目だつ様な目に会わなきゃ行けないんだよ！」

よく見ると俺は聖祥の制服を来ていた。何時の間に？と言う疑問は置いといて、バックは何処だ！

「（えっと、玄関の近くに有るはずだ）」

俺はダッシュで玄関に行った。
そこには、黒いランドセルが置いてあった。そう言えば、
「なぁ、聖祥って何処に有るの？」
うん。これ大切な？場所が分からなければ行く事ができない。
「（学校？だったら、こういう場面の為に俺が能力を渡したんだろ？）」
「能力？あぁ、あの能力ね？でも作り方わかんねぇんですけど」
「（あぁ？そんなん簡単だ。能力創造発動（スキルサクセサー）っって自分の欲しい能力を想像してみろそれに近い又は、その能力を創れる筈だ）」
筈ってちょｗｗおまｗｗｗ
まぁいい。この場合は何だ？聖祥の場所を分かる様にするんだよな？って事は何でも分かる能力だな？
「能力創造発動（スキルサクセサー）。俺が望む能力は、答えを出す者（アンサー・トーカー）」
……うん？
「これで良いのか？」
「（おう、それでいい。さて、身体能力は生前のままだ。それに早く行かねーと間にあわねぇーぞ？）」

はっ！？そうだった！忘れてたぜ。

「いって来ます！」

～回想終了～

てな事があったんです！

そして、着きました。聖祥学園！！デカイですねーアニメでも見たけど。こんなトコにこんなデカイって。さすが私立ですね。

「さて、職員室でも目指しますかね」

てな訳で着きました。職員室。え？飛ばし過ぎだって？

それもそうだな。と言っても語る事なんざたいして無いから良いの！てな訳で

「失礼しまーす。本日より編入して来ました。豊倉です。」

そう言って入って見たら、先生が全員コッチを見て来た。

やめて！人に見られるなんて好きじゃ無いんだよ！

俺がそんな馬鹿な事をしていたら、一人の男の人がこっちに来た。
はっきり言って地味、これと言った特徴がない。
そんな人が俺に話しかけて来た。

「こんにちは、君が豊倉君だね？僕は君の行くクラスの担任の高橋一郎って言います。ヨロシクね？」

そう言って手を差し出して来た。

「はい、ヨロシクお願いします。」

俺はそれを笑顔で答えた。

「さて、それじゃぁ、行こうか」

「はい」

移動の際中は無言で進んで行った。

教室の前に着いたら

「中で呼ぶから、その時入って来てね？」

そう言って教室に入って行った。

今時はこんな感じなんだなぁ。と思いながらも、なのは達と同じクラスにならない様に祈りながら声がかかるのを待った。
あれ？フラグじゃね？

「それじゃぁ、入って来て」

おっ、呼ばれたっぽいんで、いって来ます。

ガラッ

俺は教室に入って先生の横に行った。

そこで見た物は

教室の真ん中辺りに栗色の髪をした少女がいました。

あぁ、あれはフラグでしたか……

第二話にして、能力の使い方がわかるようです。（後書き）

話が進まない。

第三話にして物語の主人公と関わる様です（前書き）

原作に早く入りたいのに…

いや、それは俺に文才が無いからか……

第三話にして物語の主人公と関わる様です

「それじゃぁ、豊倉は高町の隣が空いてるから、そこな？
高町手挙げろ」

「はーい！ヨロシクね？豊倉君？」

な、なんですとー

ｏｒｚお、終わった。俺の平凡な転生生活が。

いや！まだだ！俺はリンカーコアを持ってい無い！だから、介入する事は無い！

「（残念だったな。俺がちゃんとつけといたぜ！しかも、魔力量も多めにしといたからな！
つか、デバイス用意した時点でリンカーコアが有るって気づけよｗｗ）」

くっ、そうだった。夜笠（魔改造品）を渡す様な奴がリンカーコアを用意してない訳が無いか。

「豊倉？どうした？」

「はい？何でしょうか？」

「いや、ボーっとしてたからな。それよりも早く席つけ」

「あっ！すいません。ちょっと考えていた物で」

俺はそう言ってなのはの隣に行った。

「よろしくね？豊倉君？」

くっ、そんな純粋な笑顔を俺に向けるんじゃ無い！眩しいだろ！

「あっ、あぁよろしく」

「さて、それじゃぁ、豊倉に聞きたいことも有るだろうし、一時間目は豊倉への質問タイムだ。それじゃあ、先生は用事が有るから静かにやるんだぞ？」

ゑ？

「「「はーーーーい！！！」」」

ちょっ！何すか！それ？ダメ？やめて！あぁ、行っちまった。

先生が出て行くと同時に、生徒達が俺によって来た。

「ねーねぇ、何処から来たの？」

「好きな食べ物はー？」

などなど聞いて来た。

あぁ、そんないっぺんに聞かれたら何いってるかわかん無いよ。俺は聖徳太子じゃ無いんですけど。

パンッ、パンッ

俺が考えていると誰かが手を叩いて皆を黙らした。
おぉ！誰だか知らねぇが有難い
「はいはい、皆、そんないっぺんに言ったらわかん無いわよ。聞くなら一人ずつ。良いわね？」
こっ、この声は！釘ミーボイス！まさか生で聞けるとは。
まぁ、そんな事よりも
「有難うな？えぇーと」
「あぁ、あたしは、アリサよ。アリサ・バニングス。よろしくね？豊倉君」
一応どもっと来ました。イキナリ知らない奴から名前呼ばれたら怪しまれるだろ？
「おう。よろしな、バニングス」
「アリサで良いわよ」
お？なんか意外と好感触だな？
「んじゃぁ、俺も沙英で良いよ」
「そう、それよりも早く質問に答えてやんなさい」
あっ！いや、待てよ？ココは俺から自己紹介した方がいいんじゃね？

「えぇと。さっきも言いましたが、俺は豊倉沙英と言います。何処から来たのかと言えば、まぁ、この街の外とでも言いますかね？好きな食べ物は、そうですね？甘い物ですかね。さて、他に何かありますか？」

そうしていって、皆の質問を答えていった。

そして、放課後

「やっ、やっと終わった」

俺はあの質問タイムが終わっても授業の合間の休み時間の最中も生徒が来ていた。

「あー！！いたー！豊倉君ーー待ってよー」

不意に大きな声で俺に呼びかけて来た声に驚き、俺は後ろを向いた。そこには、栗色の髪をした女の子とその後ろから藍色の髪の毛を女の子とアリサがいた。

「えっと、高町どうした？そんなに急いで」

「えっとねー、豊倉君甘い物が好きって言ってたから、うち喫茶店してるから良かったらこない？」

と、上目遣いで俺を見てくる。

後ろの二人も断ったら承知しないよ。と言った様な目で俺を見てくる。

これを断らなければ俺は原作に一歩近づく。と俺は自分に念じていたーーーーー

「ただいまー」

ーーーそんな事を思ってた時期も俺にはありましたよ。

いやね？やっぱり女の子のお願いだしね？甘い物を食べられるなんて甘党の名にかけて行かねばならないでしょ？普通。

あぁ俺は無事に生きて行けるのだろうか。

第三話にして物語の主人公と関わる様です（後書き）

後二話ぐらいで原作に入れるかも……

そこは作者次第……

第四話にして、時代が分かる様です（前書き）

ぶ、文才をｐｌｅａｓｅ……

そして、何よりお気に入り登録が二桁いってました。登録してくださった皆様、有難うございます。

今回はちょっと無理矢理っぽいです。

第四話にして、時代が分かる様です

「今日は豊倉君の編入祝いと言う事で、ささやかながらケーキをご馳走するの。遠慮なく食べてね？」

「あぁ。でも悪いからお金は払うよ」

うん。俺が普通の店で遠慮を無くしたら、五桁行っちまうからな。

「ダーメ！それじゃぁ、あたしがお店の為に連れて来たと思われちゃうの！」

うーむ、気持ちは有難いんだがな。

「だがな高町、俺はお前の親に迷惑をかけたくない。こう見えても結構食う方でな、この前なんか五桁行っちまったんだよ。だから、このお店を紹介して貰っただけで嬉しいよ。まだこの街に来て間も無いからね」

「五桁ってあんたどれだけ食べるのよ」

アリサが何か言ってるが無視。
つか、月村あんた空気になってんぞ？

「うー、分かったの。でも！！」

「な、なんだ？」

「あたしの事高町じゃ無くて、なのはって呼んで！」

「あぁ、そんな事か、んじゃぁ俺の事も沙英で良いよ」

「うん！よろしくね！沙英君！」

「あっ、あたしの事もすずかで良いよ」

おっ！ようやく喋ったか、可哀想にな、作者がクズだからそんな風になっちまったんだ。許してくれ。

（メタ発言禁止！ｂｙ作者）

何か電波が届いたが、気のせいだろう。

「そうか、俺の事も沙英で良いよ。よろしくな、すずか？」

「うん、よろしくね？沙英君」

それから俺たちは他愛無い話をしていた。その間に俺が前居た街について聞かれたがそこは前世の言った。

そして、時刻は午後五時ちょっと前

「さて、時間も時間ですしそろそろ帰るかな。それじゃあなのは、お会計よろしく」

「うん。お母さん、お会計お願い」
なのはがそう言うと、奥からなのはのお母さんの桃子さんが出て来た。
奥から？それを疑問に思い、周りを見てみると誰もいなかった。どうやらそれ位なのは達と喋るのに夢中になってたらしい。
「それにしてもよく食べたわね？こんなにお金有るの？」
ふっ、ついに五桁行っち待ったぜ！
とは言わないけど、自重して、その半分位に収めと来ました。俺って偉くね？
「はい、大丈夫です。はい」
と、俺は万札を取り出した。
えっ？この金どうしたかって？それはランドセルの中に入ってたんだよ。五万位…
「あっ、はい。じゃぁ、お釣りね？また来てね？」
「はい！とても美味しかったので絶対にまた来ます！それじゃぁな？なのは、アリサ、すずか」
と言って、店を出た俺は

図書館に来ました！
え？なぜかって？それはこの世界の歴史が俺の前世の歴史と同じなのかってね？知りたくなったからさ！

そんな訳で、本を探したのですが全部俺の知ってる歴史通りでした。
どうやらこの世界は魔法は存在するがその他は前世と同じだと言う事ですな。うむ。
さて、時間も時間ですし帰りますかな。

そして、俺は図書館の入り口に来たところで、背中に大きな衝撃を受け、転けた。

「いった～。オイあんた、すまねぇな」

俺はその声の聞こえた方を向いて見た。

そこには、赤い髪の毛をした女の子幼稚園生ぐらいの子がいた……
……

あれ？無印は？あの神はなにやってんだよ！えっ？そこは無印からじゃ無いの？別に介入する気なんてサラサラねぇけど何か納得いかねぇよ！！

「こら、ヴィータ！図書館の中で走っちゃダメってゆーたやろ！ごめんな～この子が走ったばっかりに、ほらヴィータも謝るんや」

奥から車椅子に乗った茶髪の女の子が来た。

「えっと、ごめんなさい」

「いや、気にしなくて良いよ。俺は大丈夫だかｒいっ！」

俺は立ち上がろうと手を着いたら、手に痛みが走った。

「ちょっ！大丈夫か？手当してあげるからうちにきいや」

え！？いや、それは有難いが勘弁だ。

「いや、大丈夫だ。そこまでして貰わなくてもこれから医者に見てもらうから」

「でも、この時間じゃ医者なんてやってへんで？」

あ……

ｏｒｚ……

そうでした。只今の時刻は五時五十分

「と言う訳で、うちにきてぇな。な？」

首をコテンと傾け俺に聞いてくる。

「はぁ、分かったよ。行くよ。俺は豊倉沙英だ。よろしくな」

「沙英君な？私は八神はやて言います。こっちは妹のヴィータや。よろしゅうな！」

「ふん！」

ヴィータはどうやら俺が気に入らない様だ。まぁ関係無いからな。

そして、俺ははやてたちと一緒に八神家に向かった。

第四話にして、時代が分かる様です（後書き）

欲を言えば、感想頂けると有難いです……

第五話にして原作に"介入"する様です（前書き）

チョットずつ増えるお気に入り登録、一向に増えない感想、これは自分に期待して下さっているのでしょうか？

そんな事を胸に書いています。今回から始めての戦闘シーンを始めます。

一言言わせてください。

戦闘シーンなんてダイッキライダーーーーーーー！！

第五話にして原作に"介入"する様です

さて、皆さんこんにちは。
豊倉沙英です。
えぇ～、あれから二ヶ月近くたち、今日は１０月２７日、つまり、ヴォルケンリッター達が蒐集を始める日です。

いや～あの日、つまり八神家に行った日はとても危なかったです。なんでかって？ヴィータには睨まれるは、シグナム、シャマル、ザフィーラにはずっと警戒されてました。まぁそれだけで終わると思ってたら、まぁシャマルがドジったと言いますか、なんと言うか、魔法を俺に使い魔法の事を俺にバラしたわけですよ？それから色々あり、俺も魔法が使えると言ってしまった俺なのでした。

ｏｒｚ……

俺は絶対に魔法を使わないって決めて、絶対に原作に関わるのを防ぐつもりだったのに、俺から関わるって、どんだけやらかすんだよ！

まぁ、それから俺ははやてと友達になり、はやての家に結構行ってたんですよ。

そんな事があり、俺は魔法を扱う特訓をしたんですよ。いや～チートつっても、使い方が答えを出す者（アンサー・トーカー）でも、どんな物が有るのか分からないんでね？

あ～ぁ、俺の決意って何だったんだろう？

まぁ、それは置いといて、ヴォルケンリッター達が今ビルの屋上に

います。これから蒐集を始める様です。

もう、原作なんて糞くらえです。この小説のタイトルは巻き込まれる様です。なんて名前だが、自分から行ってやんよ！

一言で言えば、情が移ったとでも言いましょうか。そんなんで介入をします。まぁ俺が関わっているって言うのをばれなくすれば良いだけだしね？さて、行きますか。

シグナムＳＩＤＥ

私達はこれから主はやての足を治す為に蒐集をする。前に主と約束をした”主はやてがマスターである限り、闇の書には関わらない”と

「主はやて、申し訳ありません。唯一度だけあなたとの誓いを破ります」

「ちょ～と待ってもらおうか？」

不意に声が聞こえ、そちらを向いてみると、そこには主はやての、いや我らの友人となった、豊倉がいた。

だがしかし、何故ここにいる？確かに奴は魔法を知っていたが。この事は奴には話していない筈なのだが。

「何故って顔してんな？ただ単にお前らと同じ考えを持ったからだ。それだけだ」

「だが、お前もこちらにくれば犯罪者扱い、いや、犯罪者になるぞ？」

「そんなのカンケーねーよ！！はやてが苦しんでんだろ？それなのに、俺ははやての友達なのに！何もできないんだよ！だから、せめて、せめて、これだけは、ゆずれねぇ！」

奴の目、決して揺らぐ事の無い真っ直ぐな目。

フッ、今の奴に何を言っても、無駄だな。

「良いだろう」

「なっ！？シグナム！？何で沙英を連れてく事になるんだよ！こいつが来ても足でまといになるだけだぞ！」

「んじゃぁ、ヴィータよ、俺と戦え、そして俺が勝ったら俺をお前らと一緒に行動させろ。良いな？」

確かに私は奴の実力を知らないからこれなら良いな。だが、ベルカの騎士に勝てるのか？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ヴィータＳＩＤＥ

時間もねぇし、とっとと片付けて蒐集に行くか！

「鉄槌の騎士ヴィータとその相棒、鉄（くろがね）の伯爵グラーフ・アイゼン。」

名乗りを上げた、だが疑問が有る。それは…

「おい、どうした？デバイスはねぇのか？」

そう、奴はデバイスを起動させていないのだ。

「デバイス？あぁ、デバイスかぁ、そうだな、使うか。行くぞ、ゴーズ」

「ようやく出番ですか？待ちくたびれたぜ！Ｓｔａｎ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ？

ｓｅｔ　ｕｐ」

奴の、沙英のデバイスのゴーズのその言葉に沙英は姿を変えていき、仮面を被った、腰からの赤いマントに装甲が薄い刀を持った戦士になった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

沙英ＳＩＤＥ

えぇ～と、ぶっちゃけ、冥府の使者ゴーズです。

まぁ、何故この姿なのかと言うと、作者の趣味＋考えるのが面倒くさいから。

まぁ、そこは置いといて、武器は両腕のアーマーに生えた刀に、右手に有る大剣。これならヴィータともやり合えるだろう。

「先に言っておく、俺はかーなーり強い！ぜ？さて、行くぞ？」

俺はそう言い、地面を蹴った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ヴィータＳＩＤＥ

沙英？いや、少し違う感じがする。いや、そんなの関係ねぇ、沙英が地面を蹴ってあたしに接近してくる。だが、そのスピードはそこまで速く無く、管理局の普通の魔導士ぐらいだ。

「ハッ！そんなんであたし達と一緒に行こうとしてたのかよ！あたし達を馬鹿にすんな！！」

あたしはそう言い、アイゼンを振り下ろした。

そして、アイゼンは奴に当たった……

第五話にして原作に"介入"する様です（後書き）

戦闘シーンと呼べる程の物では無かったですね……

次回は戦闘シーンがメインになります。

ちゃんと書けるか心配です。

第六話にして、初戦闘の様です（前書き）

戦闘シーンが難しすぎです。

上手くかけてるか分から無いですが……

少し間違っている部分がありましたので直しました。

第六話にして、初戦闘の様です

確かに当たったが、奴は吹っ飛ばされなく、霧散していった。

「な！？何が起こった？」

「ふははは、後ろだぜ？」

あたしはその言葉を聞きアイゼンを振り向きざまに立てた。

ギャン！！

金属がぶつかり合う音がした。

バッ！

そこをバックステップで離れた。

危なかった。あとちょっとでも遅れてたら、あたしの負け……

どうやら、そこそこやる様だな。

それなら、あたしも本気でやらなきゃな。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

沙英ＳＩＤＥ

「アイゼン！カートリッジロード！」

カートリッジロードか、本気でくると言う事ですか。
しかし、どうやったらあんな風に形が変わるんでしょうかね？
……

「ラケーテン！ハンマー！」

おおぅ、回転しながらこっちに来ましたよ。あんなドリル見たいのがついてるって事はあれか？バリアなんて意味ねぇとでも言いたいのか？まぁ、バリアなんて使わねぇぞ？俺は逃げる！！

俺は最初に使った技を、使い、逃げた。

俺の偽物はカイエントークンで、俺のタイミングで何故か出せるんだよ。まぁ、カイエントークンは俺の魔力から作っているからその量に応じて攻撃力は上・下する。

因みに今のヴィータの攻撃力を３０００とすると、最初のカイエントークンは５００程度だ。

で、今回が３０００程度、つまり、相討ちになるんだが。

カイエントークンはヴィータの攻撃を受けきった。まぁ、あれだ遊戯王で守備のモンスターと攻撃のモンスターの値が一緒だったってのと一緒だ。

「なっ！？今度は消えねぇだと！？」

「当たり前だ。そいつは俺であり、俺では無い。お前らと同じ擬似生命体だ。俺からの魔力供給量で力は変わってくる」

「チッ！て事は二体一をしなきゃなんねえのかよ」

「いや、そんな事はねーよ」

俺がそう言った途端にカイエントークンは霧散していった。

「どう言うことだ？あたしを舐めてんのか？」

「そうじゃねぇよ。唯何回でも出せるが時間制限が有るんだよ」

「そうか、だったら話が早い。速くお前を潰しちまえば良いって事だな！」

ヴィータは鉄球を俺に向かって3つほど打ち出した。

俺は空中に飛び、避けながらも、鉄球の解析をした。

あれは追跡弾、ホーミングか、だったらぶっ壊すのが手っ取り早いか。

俺は右手に有る大剣で一閃した。

バンッ！

鉄球は爆発した。

「いや～危なかった～。全く、お前は手加減って言葉を知らないのか？」

「何言ってんだよ。あんな簡単にぶっ壊した奴が……お前に手加減

したら、あたしがやられちまうぜ？」

はぁ～、どうやら手を抜いてくれる気配は無い様ですね。しかし、それを破ってこそだな。

「行くぜ！ゴーズ！カートリッジロード！」

「なっ！？お前のにもあんのかよ！」

ヴィータが驚いているがそんなの関係ねぇ、俺の右手に有る大剣かカートリッジをロードした。

それにより俺は一時的に魔力量が多くなり、この技が使える様になる。

「ヴィータ、防御をする事を勧める」

「は？なにいってんだ？」

俺はヴィータに背を向け、大剣を水平に横に構えた。

「行くぞ？

秘剣！燕返し！！」

燕返し、某運命の英霊が使った技。３つの斬撃で確実に相手を仕留める技だ。まぁ、俺のこれはそこまでできたものでは無い。俺は多重次元屈折現象なんて上等な物は出来無いから、俺はこれを魔力で補っている。斬撃なんて飛ばす事は不可能だから、魔力刃を飛ばし、それに近い物を作り上げた。まぁ、なんちゃって燕返しだね。

さて、ヴィータはどうなる事やら。

「…ッ！？ぐわぁ！！」

どうやら、食らった様だ。ちゃんと忠告したはずなのにな。……いや、相手の言う事信じる方がおかしいか。

さて、終わりだ。

俺はヴィータに高速で、近づき首元に大剣をあてた。

「くっ！あたしの負けだ！」

ふぅ、終わったな。

「そこまでだ。しかし、凄いな沙英は。私としては、いや、私達はお前が負けると思ってたのだがな」

「いやぁ～、あんな啖呵切っちまったからな、負けられなかったんだぜ？」

「まぁ、それもそうだな。だが、今度は私と死合おうか？」

なっ！？ここでくるのか！？

「いや、丁重に断らせてもらおうか？今度やってやるから、な？」

「ふむ、分かった。今度やろうか？」

あぁ、俺ってばなにこれからも生きていけるだろうか？

第六話にして、初戦闘の様です（後書き）

感想、批評、アドバイスなどありましたら、よろしくお願いします。

第七話にして、オリキャラが出る様です（前書き）

今回は今までで一番長いです。

試しにこんなに長くしてしまったため、誤字脱字があると思います。

第七話にして、オリキャラが出る様です

海鳴市上空

そこには赤い髪、赤いゴスロリを着た少女、青い、いや蒼と言った方が良いだろう。蒼い毛をした大きさからして、狼だろうか、それと全身黒い服を着て、腰辺りに赤いマントをしさらにその上から黒っぽい外套をした、身長からして小学生らしき人物がいた。

沙英ＳＩＤＥ

あれから一ヶ月とちょっとが経った。

え～と、只今海鳴市上空にいます。何やらヴィータが時々感じてた馬鹿デカイ魔力の蒐集をしようとしているんですよ。まぁ、俺が介入してもブレイクして無いので、今までも普通に人を襲ってますけどね。

えっ！？学校はどうしたかって？そんなのサボってるに決まってんだろ？

「ヴィータ、本当にやるのか？」

「当たり前だ。あれだけデカイ魔力があったら２０ページぐらい稼げるんだ」

「そうか、ザフィーラもそれで良いか？」

「我はそれで良い。では、手分けして探そう」

そう言ってザフィーラは踵を返して何処かへ行ってしまった。

「ヴィータ、俺も行く。ちゃっちゃっとその魔力の大きい奴を倒して、はやてを直そうな？」

「ふん、お前に言われなくても分かってんだよ。ただ、あたし達の誰よりも強いんだ期待してんぞ？」

ヴィータは素っ気なく言ったが、最後の方は顔を赤くし、そっぽを向いて言っている。ほんとに

「可愛いな」

「んな！？な…なに言ってんだよ！そんな事良いから探してこい！／／／」

あらら、声に出てたみたいだな。まぁ、いいか、可愛かったから。

「はいはい、それじゃぁな！」

そう言って俺はザフィーラとは違う方向に向かって飛んで行った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ヴィータＳＩＤＥ

「封鎖領域展開」

沙英が行った後すぐにあたしは

結界を張った。

「さて、とっととぶっ飛ばすぞ！！」

これで少しでも早くはやてが治るんだ…あたしは人殺し以外はなんだってするって決めてんだ。だから、今更こんな事で辞めるわけねぇんだ！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

沙英ＳＩＤＥ

なんかドンドンうっせえんですけど？

なんか遠くで赤い魔力光と桃色の魔力光がどんぱちを繰り広げている様だな。

そろそろ向かった方が良いのか？

うん？蒼い光がどんぱちの方に行ったな。いや、魔力反応が四個増えた！？……一体なにが……は！？まさか、管理局が来たのか！

「くそ！ヴィータがあぶねぇ！！」

俺は俺の持てる最高スピードでヴィータの元に向かった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

わたしが赤い服を着た女の子に攻撃を受け、ビルの中に飛ばされて、赤い服の子がデバイスのハンマーを振りかぶって持ち上げたら私はあぁ、もうお仕舞いかと思ってギュッと目をつむって、くる衝撃を待ったの。でも来ないので何事かと目を開けたら、そこには金色の髪をしたわたしと同い年位の女の子が赤い服の子のハンマーを防いでいたの。

わたしはこの子を知っている。
そう、わたしと友達になったその子の名は……

「フェイトちゃん」

わたしはフェイトちゃんに聞こえるかどうか分からない位小さな声を出した。

「フェイトだけじゃ無いぜ？なぁユーノ」

わたしの左側から声が聞こえて来てそっちを向いて見る。そこにはあの事件でフェイトちゃんと一緒に行動をしていた、青木君がいて右側にはユーノ君がいたの。

「ごめんなのは、遅くなった」

「チッ！仲間か」

赤い服の子が苛立ちながら、バックステップでそこをどいた。

「友達だ」

静かに、かつ、力強くフェイトちゃんはいった。

「さて、俺の友達にこんな事をしといてただで済むと思なよ？」

青木君がそう言うと一気に辺りの空気が凍りついたかの様に低くなった。これが殺気ってやつなのかな？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

青木ＳＩＤＥ

えぇ、皆さん始めまして、俺は青木大貴（あおき ひろき）です。まぁ、俺はいわゆる転生者だ。まぁ、これは神様がミスったって言って、それの罪滅ぼしでこの世界に来たわけだ。まぁ別にハーレムを築こうとしてるわけじゃ無い、あぁしてるわけじゃ無いんだ。大事な事なので二回言ったがどれ程大事なのか分かってもらえたかな？

自己紹介は置いといて、俺は胸糞悪くなっている。何故なら俺の友達のなのはにこれだけボッコボコにしておいて奴、ヴィータが無傷なのが気にいらねぇ。確かに、原作だと対して喰らわなかったがここだと無傷って何だよ。今はフェイトと話をしていて、ここで割って入ったらＫＹになっちまうからな。うん。

「ユーノ、なのはをお願い、大貴行くよ」

おっと。どうやらヴィータはもう外に行った様だな。

「了解、シリウス行くぞ」

「ケケケ、了解したぜ。相棒」

全く相変わらず口が悪いな、こいつは。

まぁこいつは、こいつ。俺は俺。さて、悪党退治とでも決め込むか！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

沙英ＳＩＤＥ

はい、とうちゃ～く。

お？これからヴィータ対フェイト＆アルフの戦いか……うん？ビルの中からもう一人出て来たな、藍色の魔力光なんて原作にいたか？……いや、いなかったはずだ。もうそろそろ忘れかけたが、それは分かる。絶対にいなかった！

てっことは、イレギュラーか？いや、そう考えた方が良いか。

俺はその、藍色の魔力光に向かって飛んで行った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

大貴ＳＩＤＥ

俺はフェイト達と協力してヴィータを潰そうとしたが、流石にそれはやり過ぎかと思い、自重しようかと思っていたら向こうから白銀？まぁそんな感じの魔力光が近づいて来た。

ありゃぁイレギュラーか……ふん、どうせチートとか言って、約束された勝利の剣（エクスカリバー）

を使うんだろう？だが俺にそんなん通用しねぇ、使えば奴が消えるだけだ。

「よぉ、お前名は？」

俺はそのイレギュラーに、仮面を被ってるって事は姿を晒させないためか…考えたな。俺はそいつに声をかけた、ヴィータを三対一は気が引けるし、イレギュラーなら少しは俺の相手をしてくれるだろう。

「なっ！？なんで、なんでお前がここにいるだ！？」

？こいつは俺の事を知っているのか？

「俺だ！沙英だ！豊倉沙英だ！！」

なっ！？沙英だと？奴は俺の前世の友達、いや心の友と書いて心友と言った程の仲が良く、中学から高校も一緒だが、俺が死んでその後になにが起こったかはしらねぇが、こいつは俺の名を知っている。それが紛れも無い事実だ。

奴は仮面を取って、その素顔を晒した……確かに、あの中性的な顔でかっこ良くも、美人と取れる奴は沙英だ……嬉しい様な、悲しい様な。

奴が向こうにいるって事は、沙英と俺は敵対しなくてはならないのか……

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

沙英ＳＩＤＥ

まさか、イレギュラーだと思ったが、まさか大貴だとはな……奴と敵対か……ふ、愚問だな。俺は何の為にこんな事をしたのか、それを考えれば自ずと答えが出てくる……

そう、俺は大貴と戦う！！
俺は仮面を着けた。はやての為……そして何より……

「さぁ、大貴よ！武器を取れ！構えろ！行くぞ！」

我が正義の為……

第七話にして、オリキャラが出る様です（後書き）

まぁ、今回長くしたのは試しにということです。

これからもこの長さで書くとなると、スピードが落ちると思います.

今までの長さで書くならスピードは早いですが、短いです。

どちらが良いのでしょうか?そこら辺教えてくれると助かります。

感想・誤字脱字・アドバイスを下さると嬉しいです。

第八話にして決意が固まる様です（前書き）

今回は独自解釈が少しながらあります。

そこら辺はあまり気にしないでくれると助かります。

指摘があり、少し書き直しました。こんなので良かったのでしょうか？

第八話にして決意が固まる様です

大貴はデバイスの槍を構えた。

大貴は転生者だ。どんな能力を持っているか分からない。だが、それはあちらも同じ、しかし俺は能力と呼べる能力は無い。あるのは答えを出す者(アンサートーカー)しか無い。まだ造ってないのだ。まぁ造るのに時間はかからない戦いの最中に造るのも可能だ。油断せず、慢心をしない。それを俺はシグナム達から教わった。

さて、俺はゴーズの大剣を構え、距離をとったまま大貴と俺は動かなくなった。

どれ位経っただろうか、ふと、俺は集中力が欠けてしまいその隙を見逃さなかったのか大貴は俺に近づいて来た。一瞬でだ。俺はガードをしようとしたが、大貴の槍は俺の大剣を弾き、俺は無防備になってしまった……

そこに大貴は槍を突いてくる、だが、俺は魔力を使いカイエントークンを作り出し、カイエントークンが槍を弾く、そして、カイエントークンは霧散していった。

危なかったな。だが、こんな簡単に殺られる訳にはいかねぇんだよ!

「はっ!どうした?その程度なのかよ!?お前が主の為にこんな事をしてんだろ!?それなのにこの体たらく!ざけぇんだよ!とっとと死んでろ!」

大貴はそう言うと俺に見えないぐらい速く動いた。

どこにいったかも分からない。奴は俺の視界から完全に消えた。

俺はこんなんで良いのか？

いや、言い訳はし無い。やるぞ。全力で。　結局は慢心をしていたのだな。俺は今は一つしか無い能力を使う。

それは全ての答えを出せる能力。答えを出す者（アンサートーカー）

俺は目を閉じ、ゆっくりと開けた。俺の目は円を何重にも書いた様な、模様をしていた。

これで、大貴を倒す。

答えを出す者（アンサートーカー）で大貴の攻撃をしてくる場所が分かる。

後ろだ。俺は素早く、後ろを向き、大剣を横にし立てた。

そこに、大貴の槍はきた。

大貴は驚いた様に目を大きく開いた。

「どうした、そんな顔をしてまだ終わって無いぞ？」

俺は大貴の槍を弾いて、袈裟斬りを放ったが奴は槍で防いだが強度が低いのかヒビが入った。

「くっ！何があったんだよ？さっきまでとはまるで別人だぜ？」

大貴が何を言っているのかは今はどうでもいい、奴の魔力を蒐集しなければならないのだからな。

俺は奴に背中を向け、大剣を水平に構えた。

「秘剣、燕返し！」

俺は魔力刃を放った、これで決める。

だが、俺の予想は裏切られ、俺の燕返しは跳ね返ってきた。

俺はそれを上に飛び避ける。あれはまさか！？

「あぶねぇ～、全くなんつー技使ってんだよ！幾ら非殺傷設定だからって、危険だぜ？」

奴の能力は一方通行の能力……

奴もまためんどくさい能力を持ってんな。

だが、俺にはこの夜笠が有るんだ…これは神様がくれた魔改造品。

俺の欲しい武器を取り出せるチート品、つまり破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）で大貴を攻撃すればいい。

俺は大剣をしまい、そして夜笠から破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）を取り出した。

「うん？何だそれ？」

この槍の事を聞いて来るが俺ははやての為にここまで来た。それなのに、ここで立ち止まるわけにはいかない！！

俺は大貴に突っ込んだ。

「おいおい、お前ならこの能力が何だか気がついただろ？」

大貴は俺がなんで突っ込んで来てるんだか、分からない様だ。

そして、俺は大貴に向かって槍を突いた。

大貴はよく分からなそうな顔をしたが、デバイスで俺の槍を弾いた。だが、それも予想の範疇。そこからは突く、払う、柄の部分での打撃を繰り返し、俺が大貴の槍を弾くと俺はカイエントークンを作り出し、攻撃をさせ後ろに回りこむそこで俺は袈裟斬りを背中に放った。

大貴はガードを張ったのだろうが、この武器は生憎と破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）だ。奴の魔力は全て消え去る。つまり、俺の攻撃は奴にくらう。

ズバッ！！

袈裟斬りにより、大貴の背中は血を出しながら落ちてった。

蒐集しなければな。

［シャマル、こいつの蒐集頼んだ］

［分かったわ］

シャマルにそう一言伝え、俺は大貴の治療に向かった。

敵とはいえ、俺の大事な友達だった奴だ。死んでもらったら俺も困る。

良かった。どうやら死んでないようだ。これなら何とか……

……

よく考えたら俺の能力って答えを出す者（アンサートーカー）しか無いな。武器だとなんかあるか？

おぉ！あれだ！俺は夜笠から医神のアポロンの杖のアスクレピオスの杖を取り出した。これは普通の杖の周りに蛇が一匹絡まっている杖だ。

これをかざせば大抵の病は治ると言われる。

まぁ、そんな事はどうでも良い。俺はアスクレピオスの杖を大貴にかざした。

すると、大貴の体から傷が無くなった。

これでいいな。

「じゃぁな、大貴」

これから何回かお前たちとぶつかると考えると心が痛むよ。お前と敵対するなんてさ。だが、俺にも小さいながら己が正義ってもんはあるんだよ。

だからこれからお前がどれ位立ち塞がろうとも俺は俺の正義を貫くだけだ。

第八話にして決意が固まる様です（後書き）

感想、批評、アドバイスを下さるとありがたいです。

第九話にして、主人公は蒐集に参加できない様です（前書き）

そろそろ、サブタイトルのネタがつきてきた様な感じがします。

第九話にして、主人公は蒐集に参加できない様です

あれから数日が経った。

因みに、大貴の魔力を蒐集したら５０ページぐらい稼げたという……

さすが転生者だな。

さて、俺とヴィータとザフィーラはとある無人世界に来ている。目的は言わなくても分かるが、魔力蒐集だ。今はヴィータがでっけぇ生物と戦っている。

俺？俺はヴィータに俺がやるって言ったんだぜ？それなのにヴィータはなんて言ったと思う？

「おめぇに任せたら、消し去っちまうからダメだ！！」

なんて言ってさやらしてくれないんだぜ？ちょっとさ、調子に乗ってさ、約束された勝利の剣（エクスカリバー）をさ、ぶっ放しただけじゃん？

やっぱりさ、折角使えるんだからやって見たいじゃん？それなのにさ、ヴィータとシグナムとシャマルには

「お前は後方で待ってろ」

なんて言われ、ザフィーラには目でやめとけみたいな目で見られて

さ、あの時は流石に泣きたかったな……

まぁ、今はもう慣れたけどな。

と言う事で俺は後方で待ってます。お？丁度蒐集終わった様だな。

「お疲れ～、大丈夫か？ヴィータ」

「ふん、こんなんで動けなくなるほどあたしはやわじゃねぇよ。ほらっ、とっとと次行くぞ」

「ヴィータ、休まなくて良いのか？」

「さっきも言っただろ？あたしはこんなんでどうにかなるほど、やわじゃねぇ。行くぞ」

そう言って、ヴィータは踵を返し、行ってしまった。

ふ～、俺もやばいかもな。そろそろ原作を忘れてきたわ。まぁ、この世界は本物であって、けっして二次元、アニメの世界じゃねぇからな、原作知識なんて必要ねぇからな。別に良いんだけどよ。何か引っかかるんだよな。何か重要な事が……

まぁ、あんま考えすぎても思い出せないし。いいか。

俺はヴィータたちの後について行った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

大貴ＳＩＤＥ

俺は沙英に負けた……

沙英と戦うのは少々心が痛むがこれもしょうが無いと自分に言い聞かせやったのがいけないのか、上手く体が動かない、それが何なのか俺には分からない。だから、俺は次から本気を出さないといけないのかな？

しかし、蒐集されたのに全然痛まなかったな…これはあれか？気絶してたからか？いやぁ～ビックリしたぜ？目が覚めたと思ったらフェイトがいきなり飛びついて来てさ、ユーノも後ろでホッとした様な顔をしてたし……嬉しかったな。

さて、そんなわけで、俺は只今海鳴市に来ています！！

これはまぁ、コッチに本部を移す事になり、来たという次第です。

そう言えば、俺の事は何にも言ってなかったな。ＰＴ事件の時俺はフェイトと一緒に行動をしていた。何だかんだあったけど、原作ブレイクはしていない。する必要がない、てかめんどくさい。ＫＹはフルボッコしてないぜ？俺優しいから。

「大貴どうしたの？」

おっと、どうやら考えすぎた様だな。

「いや、何でもない。ちょっと考えてただけだ」

「そう？それなら良いんだけど。それよりも早く来て！！アリサとすずかが来たの。早く行こ！」

あぁ、そう言えば俺もＤＶＤに映ってたな。さて、行きますかな。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

沙英ＳＩＤＥ

無人世界に行って、数日が経ちました。

只今、管理局員に囲まれてます……

「管理局員か……」

「でも、こいつらちゃらいよ。返り討ちだ」

「まぁ、まて。こいつらから殺気と言うか、その類のものは感じ取れない。……それなら奴らの狙いは時間かせぎか？」

はっ！？とした感じで、上を見た二人。そこにいたのは……

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！！」

確か、クロノが俺たちに無数の刃を俺たちに向けて撃って来た。

ドンッドンッドンッ！！！

だが、そこは盾の守護獣です。

「ザフィーラ！」

「気にするな。この程度でどうにかなるほど、やわじゃ無い」

腕に刺さった刃をぶっ壊す。

かっこいいよ。ザフィーラ。お前こそ男の中の男。漢だよ。

「なのは、フェイト、大貴！」

クロノがよく分からない方を向いてそう言った。

そっちを見てみると、そこには栗色の髪をした子、金色の髪をした子、黒い髪をした子。

まぁ、単純に言えばなのは、フェイト、大貴。全く、大貴も来るなよ。ハァ……

「レイジングハート」

「バルディッシュ」

「シリウス」

「「「セート、アップ！」」」

なのはとフェイトは原作どうり。大貴は前と同じ槍を持った青い槍兵になった。

奴らは他のビルに移動した。
そこでフェイトが口を開き
「私たちは戦いにきたんじゃない。まずは、話を聞かせて」
「闇の書の完成を目指している理由を」
ハァ……言う訳ないだろ？それをこいつは……全く、面白いな。
こんな奴見た事ないぜ。
「あのさ、ベルカの諺にこう言うのがあんだよ」
ザフィーラが何事かと言う様な感じで、ヴィータを見る。
「和平の使者なら槍は持たない」
なのはとフェイトは意味が分からなげで、お互いを見あって首を傾げる。大貴はわかってる様だな。ずっと俺を見てる。
「話し合いをしようってのに、
武器を持ってくる奴がいるかバカ！！って意味だよバーカ！」
「なっ！？いきなり有無を言わさず襲って来た子がそれを言う！？」
確かにそれはそうだな。だがな、なのはよ、別にヴィータは話し合いなんてする気が無かったから良いんじゃね？
「それに、それは諺ではなく、小話のオチだ」

うわぁ、ヤバイヴィータ、恥ずかしい！さぁ、どうする？

「うっせぇ！良いんだよ。細かい事は」

開き直ったか……まぁ、そんなヴィータも可愛いがな。

ドンッドンッ！

紫色の雷が落ちて来た。

そこから出て来たのはシグナムだ……

なんてかっこ良い登場の仕方なんだよ。

そこからなんか話して臨戦体制をとった。俺の目の前には大貴が来た。

さて、第二ラウンドだ。

第九話にして、主人公は蒐集に参加できない様です（後書き）

感想・誤字脱字・アドバイスなどお願いします。

第十話にして、二つ目の能力の様です

皆さんこんにちは。只今、マジで帰宅したい豊倉沙英です。
なぜかって？それはな……

「早く構えろ、沙英。やるぞ？」

大貴が俺と戦闘をしようって待ってるんですよ。はっきし言って迷惑極まりないって感じです。

「どうした。来ないのなら、こちから行くぞ！！」

大貴は槍をこちらに向けて突っ込んできた。
やらなければならないのか。

「行くぞ。俺、がんばれ俺」

自己暗示をかけながら、答えを出す者（アンサートーカー）をかけた。

俺は大貴の攻撃を全て、大剣で防ぎこちらからは何もしないというのが続く。

痺れを切らしたのか、大貴は急に間合いをとる。

「おい、なめてんのか？そんなんで俺を倒せると思ってんのか？」
殺気が強くなった。シグナムたちのを浴びて、耐性を持ったと思ったが結構きついな……
「お前が本気で来ないのなら、こっちは本気を出させて貰うからな」
そう言うと、大貴はこちらに手を向けた。何をする気だ？
「ザケルガ！！」
大貴がそう言ったら、俺に向けて一直線の電撃が飛んで来た。
これは！？『金色のガッシュ・ベル』の術だと！？
また厄介な能力だな。
だが、これはヤバイぞ。俺は答えを出す者（アンサートーカー）しか無い俺には避けられる事は出来るがきつい……
能力を作るしか無いのか……
だが、何を作れば良いんだ？ここで無難なのは、Ｆａｔｅシリーズだな。丁度武器も出せるし。これでいいか…
俺は障壁を３６０。に展開し、
「能力創造発動（スキルサクセサー）。俺が望む能力はＦａｔｅシリーズの能力”全て”」
これで俺はＦａｔｅシリーズの全能力が使える様になった。

「（はーい、久しぶりの登場の神様です！）」

「なんで、出て来たんすか…」

「（まぁまぁ、俺の話を聞け。その能力は魔術回路が必要だが、いまからそんなのは取り付けられないので、リンカーコアを源として、使える様になったからそこらへん理解しといてね～）」

パリンッ！

障壁が壊れた様だ。さて、いろいろとわかったしな。やるか。

しかし、以外に早かったな、もう少しかかると思ったが……

まぁ、『金色のガッシュ・ベル』の術だしな。

「さて、そろそろ本気で俺もやらせてもらうぞ？」

「ふっ、漸くか、待ちくたびれたぜ。さぁこれからが本当の戦いだ！！」

「テオザケル！！」

「熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）」

大貴のデカイ術を最強の盾で防ぐ。全く、こんなんばっかやられたら俺がもたねぇよ。

「おぉ、それがお前の力かありきたりだなｗｗｗ」

こ、こいつ、ふざけた事を。ふん、まぁいい、ぜってぇぶっ飛ばす！

「そんなんで俺に敵うかな？今の俺に」

いやいや、舐めすぎだろ大貴さん。俺には答えを出す者（アンサートーカー）があるし。

それに、こいつ性格変わったな。

……なんか気にいらねぇな。全く本当に前世は友達、しかも心友だったのか？それにあの態度、前あんなにボッコボコにしてやったのにそれを忘れてるみてぇだな。

よし！いいだろう。この事件が終わるまで、本気で潰してやるよ！

「とっとと終わらせるぜ！カイエントークン！」

俺は結構高めの魔力を使い、カイエントークンを呼び出し、大貴と戦わせる。

その間に俺は大剣で大貴に斬りかかった。二体一はきついのか段々と大貴は俺たちに押されてく。そこで、俺は夜笠から破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）を取り出し、胸の辺りを斬る。だが、大貴も来ると分かったのか、後ろに身を引いて避けようとしたが、浅く入った。痛みで顔を歪ましているうちに俺は蹴りを放ち、大貴を吹っ飛ばした。

そして、俺はこの結界を壊す為に約束された勝利の剣（エクスカリバー）を取り出した。

「みんな！これから結界破壊の砲撃を打つわ！上手く除けて撤退を

！］

［［［応！！！］］］

ありゃりゃ、シャマルが先に来たか、だがそれはページがへる、つまりこれは俺がやるしか無い。カイエントークンはまだ時間はもつ、ならば俺がやるしか無い。

［待ってくれ！それは俺が引き受け様！シャマルは先に撤退してくれ！］

［でも！今の結界は強化されてるわ！いくら沙英君の武器でも無理よ！］

［心配無用。俺のありったけの魔力を込める。だから大丈夫だ。では、行くぞ！！］

俺は半分近くの魔力を込め、解き放った。

「約束された勝利の剣（エクスカリバー）！！！！！」

解き放った金色の光は結界に当たり結界を破壊した。

そして俺はその場から離れて行った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

クロノＳＩＤＥ

くっ！仮面の男さえ来なければ闇の書を確保できた物を！

「問題は彼らの目的よねぇ」

「えぇ、どうも腑に落ちません。彼らは自分の意思で完成を目指している様にも見えますし」

「うん？それって何かおかしいの？」

アルフが会話に入ってきた。

「闇の書ってのは、ようはジュエルシードみたくおっきな力が欲しい人が集めるもんなんでしょ？

？？　だったらその力が欲しい人の為にあの子たちが頑張るってのもおかしく無いと思うんだけど」

確かにそうかもしれないが…母さんと顔を見合わる。

「第一に闇の書はジュエルシードみたく、自由な制御が効かないんだ」

「完成前も完成後も純粋な破壊にしか使えない。少なくともそれ以外に使われたという記録は残されて無いわ」

僕の言葉に母さんが続ける。

「それからもう一つ、あの騎士、闇の書の守護者の性質なんだが人間でも、使い魔でも無い、闇の書に合わせて魔法技術で作られた疑似人格。主の命令を受けて行動するプログラムにすぎないのだが、一人人間がいる。それが大貴と戦った、仮面の子。僕を襲った仮面の男とは違い、闇の書の守護者たちとずっと一緒にいるという事は

この子が主なのかもしれない」

僕がそう告げたら

「そりゃぁいいじゃないか！とっとと終わってさ！この子たいした事ないんじゃないか！」

アルフ、君という奴は……

「いや、そんな訳ねぇだろ。この俺の攻撃を全て防いだんだぜ？それなのにたいした事無いとか、俺がなんでリンカーコアを取られたと思ってんだよ」

大貴がアルフに言った。

確かに、僕以上の実力がある大貴がやられたのだから、この主を捕獲するのは難しい。だから闇の書を直接奪うしか無いのか……

「大貴、私に稽古をつけてくれるかな？」

「ほぉ？また突然だな？どうした？」

確かに。フェイトとあのシグナムという守護者は互角にやり合っていると思うのだが。

「シグナムと私は確かに互角に戦ってるかもしれ無いけど、なんて言うかな？本気で戦っているんだけど、手加減されてる感じなのかな？よくわかん無いけど、全力でやって貰ってないのが悔しくて……だから私に稽古をつけて！」

「分かった。他ならぬフェイトの頼みだ。俺の全力を持って、手取り足取り教えてやるよ」

「手取り足取り！？いや、でも、まだ私たちには早いけど、いや、別に大貴が嫌という訳じゃ無いよ？むしろ嬉しいと言うか、で、でも、二人きりでお願い、します。」

フェイトの顔が真っ赤になった。全く、この二人は相変わらずだな。よく見ると、僕以外は二人を残し居ない。それに続き僕は部屋の外に出て行った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第十話にして、二つ目の能力の様です（後書き）

感想が欲しいです……

お願いします。

第十一話にして、一休みの様です（前書き）

感想って嬉しいですね。

これからも感想下さると嬉しいです。

※今回は一番長く成りました。過去最長。まさか、こんなに長くなるとは思わなかったです。

では、どうぞ。

第十一話にして、一休みの様です

俺は今自分の家に居ます。

そして……

「沙英君、本当に何もないんだね」

「沙英、お前すごいなこんな所に住んでいるなんて」

「あ、な、なのは、大貴ダメだよ。人の家なのにそんな事をしちゃ」

え～、上からなのは、大貴、フェイト。何故こいつ等がここにいるのかと言うと回想行ってみよう。

～回想～

「ふぁ～あ。しっかし、久しぶりだな自分の家で寝るなんて、今まではやての家で寝てたからな」

そう。俺は蒐集を始めてから殆どはやての家で寝ていたのだ。簡単に言うと蒐集が楽になるからだ。

さて、今日は非番だし、買い物でも行きますかな。

そうして、俺は例の外套を着て外出をしようとして、外を出たんです。何気なく右側に目を向けたら、そこに居たのが俺の前世からの友達そして、この世界で友達になったなのは。一回もあった事の無いフェイトでした。

そして、俺の家に上がり何もない俺の部屋を見て、冒頭に至る訳です。

「さて、俺は出かけようとしていたのだが、お前等はなにしに来たんだ？」

「なに？って、遊びに来たんだが？」

おい、大貴、だから俺は出かけようとしていたと言ったんだよ。この意味分かるだろ普通。

とっとと出てけよ。

「そうだ！だったら皆で遊びに行こうよ！」

……は？なに言ってんですか？この悪魔さんは？どっからそんな話の流れになったんですかね？俺には分からないです。

「沙英君？何か変な事考えていなかった？」

「い！？い、いや。別に何も考えていなかったぞ？」

「おっ、いいねぇ。よし。友好を深める為に行こうじゃねぇか」

大貴、君はあのやり取りに何も感じないのか？

「そうだね。私も沙英とは始めて会うからいいと思う。うん。それじゃぁ行こうか」

あれ？俺の意見は聞かないんですか？

「ほら沙英君、早く行くよ！」

おい！そんな事言いながら腕引っ張てんじゃねぇよ！

誰か！！あ～～れ～～。

……豊倉沙英は連れ去られた。

そして、連れ去られて街の中に来ています！

「まったく、で？なにするの？」

こいつ等は計画があってここに来たんだよな？

「え？何ってなに？」

「へ？いや、だから、何するの？」

「え？別に、ブラブラするだけだけど？」

なん……だと？俺はそんなんの為にここに連れて来られたのか？俺は用事があったって言うのに。

「はぁ、仕方ねぇ。俺に行きたい所が有るからそこ行くか？」
「うん。あたしはそれで良いけど大貴君とフェイトちゃんは？」
「俺はなんだって良いよ」
「私も沙英の意見で良いよ」
まったくこいつ等は、なんで俺に丸投げなの？
まぁいいさ、では、行くとしますかね。

やって来ました、デパート！
理由は単純。クリスマスプレゼントだ。
「沙英、何しにここに来たんだ？」
「クリスマスプレゼント買いに来ただけだけど？」
「誰の？」
「誰のって言われても、友達としか言いようが無いな」
「そう」

そう言い何だか落ち込んだ感じを見せるなのは。あれ？俺何か悪い事した？
そう思い、大貴とフェイトの顔を見ると何だか呆れられた。
なんで？

まぁ、気を取り直して何を買おうか、これが問題だな。俺は前世でも女性と付き合った事がない。だからどんな物を買えば良いのか分からない。だから丁度良かったのかもな。

「で？何を買うか決まってんのか？」

「いや、それが何を買えば良いか分からなくてな。そこで何を買えば良いか教えて欲しい」

「分からないって事は女の子に上げるの？」

「本当なの！？ねぇ！嘘だよね！？私とは遊びだったの！？」

おい～！なのはさん。どこでそんな言葉覚えたんだよ！つーか、その前にそんな変な事した覚え無いんだけど！

「酷いな、お前。沙英がそんな人間だなんて知らなかったぜ。あ、近寄らないでくれるか？怪我れる。あ、フェイトにも近寄るなよ？ぶちのめすからな？」

「やめて！！本当にそんな人間じゃ無いんだ！！ほら！周りの人からも汚物を見るかの様な目を向けられてるじゃ無いか！」

ぐふっ！俺に味方はい無いぜ。

「つーか、お願いだからもう辞めて！」

「了解、了解。いや～面白かったぜ？まっ！冗談もここまでにして行こうぜ？」

くっ、何故大貴が仕切ってんだ？……まぁいいか。さ、さっさと買おうかね。

「沙英君。何が欲しいの？」

「そうだなぁ。一つはぬいぐるみ、後は……決まってない。だから一緒に考えてくれ無いか？」

「まぁ、良いけどよ何個買うんだ？」

「えっとな、五個、だな。で、その内の一つしか決まってない」

「はぁ、考えたのか？」

「い、いや。それはほら！あれだ。実物を見て決めようとしたんだ」

「それなら皆女性に？」

「いや、一人だけ男の人がいるな。人？いや、匹か？」

「それなら、どっかの家族にか？」

「家族？あぁ、そうだな。確かにそうなるな」

［バカか、お前は歯切れ悪いと変な風に疑われるぞ？］

大貴から念話が来た。こいつはなに考えてんだよ。俺は一般人装ってんのに……

［今は念話してくんな。変な風に思われる］

まったく、俺の正体がばれたら大変なんだからな。それなのにこいつは何がやりたのやら。

「それで、沙英はどんな物がいいと思うの？」

「ん？そうだな、アクセサリーなんかが良いと思うんだが、どうだ？」

「そうだね、女性にあげるなら上等手段だね」

「それなら向こうにお店があったから行こう！沙英君！」

だから、腕引っ張んなよ！

そんでもって着きました。

アクセサリー専門店『アクセサリー』……いや、ネーミングセンスなさすぎだろ。なに？アクセサリーって、超安直すぎんだよ！

まぁいいか。

……おっ！これなんか良いな。ネックレスで黒い星。闇の中に光る星って感じではやてにピッタリだ。よし、これと……ん？このピンクのハート、シグナムにあげるのも良いな。どんな反応するか……楽しみだ。よし！これで行こう。他には……！？これはぬいぐるみじゃなくこの、ドクロのネックレス……うん。ヴィータはこれで良いか。問題はシャマルだな。何か良い物は無いか……おっ！これだな。緑色のクローバーの形をしたネックレス、よし！決まりだ！

「すいませーん。これとこれとこれとこれとこれ下さい。あっ！ラッピングもお願いします」

店員は、はい、と言いながら他の店員も呼びラッピングを始めた。それで他の店員が会計をしに来た。

いやはや、ビックリしたぜ。全部で五十万したんですよ。ヤッパリこう言う物は高いんですね。

「お待ちどうさまでした」

店員から商品を受け取り、皆の所に行った。そういや、意見なんて聞かなかったな。まっ、良いか。

「お待たせ。あれ？なのはは？」

そこに待ってたのは、大貴とフェイトだけだった。

「あぁ、なのはならあそこ」

大貴にそう言われ、指を向けた方に行くと、なのはがさっきの店でじっと動かないでいる。

「早く連れてこい。沙英、お前の仕事だ」

はぁ、仕方ねぇ。

「なのは、どうした？行くぞ？」

「あっ、沙英君終わったの？」

「あぁ、ほら行くぞ？」

「あ、待ってよ！」

俺はなのはを連れて大貴の元に戻った。

「そんじゃま、行こうか。つってもどこに行く？」

「わりぃ、俺用事思い出したわ。だから先帰らせてもらうわ」

「そうか、それじゃな。ガンバ」

大貴はニヤニヤしながら言って来た。まったく、全部お見通しってか。

困るねぇ。まっ言いか。

俺は目的を果たす為に行った。

時間はたち、あれから一時間経過した。
？ザフィーラのはまた後ほど。
おぉ、丁度良い所に大貴達が来た。
「よぉ！待ってたんだぜ？なにしてきた？」
「別に、普通に買いものをしてただけ。それにもう帰る予定だぜ？」
見ると、フェイト、なのは、大貴は買いもの袋をぶら下げてた。
「いや、ただ皆で帰りたいだけだ。気にするな」
「ふーん。まぁいいか。それじゃ帰ろうぜ」
そうして、四人で帰ってった。
そこで、俺は用事の件でなのはを呼び止めた。
「なのは、ちょっといいか？」
「ん？どうしたの沙英君？」
そこで俺はある物を取り出した。それをなのはに渡した。

「なにこれ？開けて良い？」
俺はあぁ、と頷きなのははそれを開けた。
「これって、あの？」
なのはは目に涙を溜めながら聞いて来た。なんで？なんで泣いてんの？
「あぁ、お前がずっと見てたからな。それであってたか？」
バッ！
なのはが俺に抱きついて来た。
「お、おい落ち着け、大貴達が見てるだろ」
「あ、ご、ごめんね」
顔を紅くしながら俺から離れた。あれ？俺はいつなのはにフラグ立てた？
？まっ、いいか。
「さて、それじゃ俺はここで。じゃぁな」
俺は大貴達から離れてった。
そして、少し広い公園に来た。
「さて、もう出て来ても良いんじゃ無いの？」

俺がそう言ったら、結界が張られ茂みから仮面を付けた男が出て来た。

「いつから気がついた？」

「ん？最初っから」

「そうか、やはり貴様を生かしておいては我らの計画に支障が出る。ここで引いてもらおう」

「はっ！やなこった。てめぇらの我が儘ではやてを失ってたまるかよ！」

「そうか、ならここで死んでもらおう！」

男は俺に飛びかかって来た。

ふぅ、めんど。まぁいいか、”あれ”の練習ができる。やりますかな。

「ゴーズＳＥＴ　ＵＰ」

俺はＢＪを装備した。行くぞ。

第十一話にして、一休みの様です（後書き）

よく考えたら金曜からテストなんですよ。

俺、勉強しろよ……

と言う訳で、次の投稿は来週以降となります。出来るだけ早めに投稿出来るように頑張りたいです。

第十二話にして、大怪我の様です（前書き）

よく考えたら自分のサブタイトルってネタバレじゃね？
なんて考えてます。

第十二話が第十三話になってたので直しました。

９月１９日沙英がスターダスト・ドラゴンを纏う時のセリフの”召喚”をあれ？これじゃ普通に召喚する事できなくね？って事で修正しました。

第十二話にして、大怪我の様です

「ふっ！せっ！はっ！」

俺は大剣で仮面の男を斬りつけるが全て躱される。何故だ？全て俺の攻撃が分かっているかのように。いくら俺が答えを出す者（アンサートーカー）を使ってないのだとしても、ここまで一方的になるとは考えられない。一体何故だ？

「ふっ、何が起こってるのか分からないって感じだな。簡単だ、これまでの経験が物言うのだよ、戦場では。さらに、一対一なら尚更だ」

確かにそうかもしれないが、ここまで一方的になるのだろうか。俺の攻撃は全て躱され、奴の攻撃を全てでは無いがくらう。確かに、経験は大事だ。だが、俺だって今まで遊んで能力に頼ってた訳では無い。シグナムや、ヴィータ、ザフィーラとも死合と言う名の特訓をしていたのだ。それなのに、何故だ？

「分からないのなら、そのまま消えろ！」

仮面の男は俺に突っ込んで来た。俺は避けようとして、横に跳ぼうと思って地面を蹴った……

と思ったが、俺はバインドで拘束され、動けなくなった。
もがいている内に、仮面の男のパンチを鳩尾に受けた。

「かはっ！」

俺はゴロゴロと転がった。

そうか、そうだったのか。
俺は今までの疑問が全て歯車が噛み合う様に解けた。

そう、奴は俺と一対一ではなく、最初っからニ対一だったのだ。一人が俺とやりやっている中、隠れているもう一人が俺に幻覚だか、俺の五感を弄って俺と対峙している奴が俺の攻撃をよけている様に見せ、まったく別の方向にいて、俺に攻撃を加えて行った。タダそれだけだった。

「けっ！なーにが一対一だ。ニ対一じゃねぇか。巫山戯やがって」

「ほぅ？気付いたか。だが、もう遅い！」

俺と対峙していた奴が俺に突っ込み、もう一人が魔力弾を打ち込んで来る。俺はそれをよける。

あぁ、うぜぇ。こんな奴にやられていたなんて、俺としたことが……

殺ってやるよ。

「ゴーズ、モード変更。デュエルディスク」

俺は静かに、相手に聞こえたかなんてどうでも良い。ゴーズに言っ

た。

まだ、満身創痍とは行かなくとも、結構ヤバイ状況だ。そこで、奥の手その一を使う。

俺が持っていた大剣は形を変え、俺の腕に装着された。

そこには、五つのくぼみがある。そして、別の場所にはカードの束がセットされていた。

俺はそこからカードを取り出し、

「スターダスト・ドラゴン融合（フュージョン）」

俺の体を光が包む。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第三者ＳＩＤＥ

そして、光が収まるとそこには両胸と両肩に蒼い宝石の様な物を埋め込み、背中には翼が生えた、体の殆どを白に覆われた人、いや、人では無い。

　あれは竜人と言った方が正しいだろう。が光が収まった場所にいた。

仮面を付けた男達はタダそれを某然と、何が起こってるのか分からないと言った風に見ていた。

「さぁ、行くぞ？覚悟は良いか？」

竜人はそう言い、仮面の男に翼を羽ばたかせ、突っ込む。先程までに付けられた傷は無くなっており、スピードは人の状態より早くなっている。突っ込む竜人を見て、ハッ！とした男達は迎撃をしようとしたが遅かった。竜人がもう目の前にいたのだ。慌てて障壁を張ったが、竜人が拳を振り上げ、それを下ろしたら障壁はいとも簡単に壊れた。男達はそれが予想外だったのか一瞬隙が出来た。それを見逃さなかった、竜人が男達に顔面、鳩尾に拳をそれぞれ叩き込んだ。

男達は後方に飛ばされた。竜人が意図したかの様に一箇所にまとまった。

「これでお終いだ！！俺に楯突いた事をあの世で後悔しろ！シューティング・ソニック！！」

竜人がそう叫ぶと、口からブレスを吐き出した。それは螺旋を描き、一直線に仮面の男達に向かった。

ドォッン！！

直撃し、辺りは煙に覆われた。その煙が晴れると直撃したのが分かるぐらいにデカいクレーターが出来ている所があったがそこには何も無かった。

「チッ！にげ……た……か……」

竜人の意識が弱くなったのか、言葉が途切れ途切れになり、姿が元に戻った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

沙英ＳＩＤＥ

くそ、体上手く動かねぇ。最初にくらい過ぎたか。

「そこまでだ！武装を解除し投降しろ！」

なっ！？ここで管理局かよ。ついてねぇ、回復しようにも動いたら何かして来そうだし。数が何人いるかもわかんねぇ。

あれ？詰んだ？いや、まだだ、まだ何かある。考えろ！俺！……

…はっ！？そうだ、答えを出す者（アンサートーカー）があるじゃないか、よし。

答えを出す者（アンサートーカー）発動。

……腕にはデュエルディスクとなった、ゴーズがある。てことはこれで転移すれば良いか。

「魔法カード（マジックカード）『強制転移』発動。それじゃぁな、管理局さん達よ」

「まずい！全員撃てぇ！！」

俺に向かって魔力弾が撃ち込まれた。だが、遅過ぎたな。あとちょっと早かったらくらってたのにな。

俺は何処かに転移した。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

はやてＳＩＤＥ

今日は何やみんな家にいて、私といっしょにいてくれるゆーてくれたんや。みんな最近は忙しかったりしてなかなか全員が揃う事は無

かったんやけど、嬉しかったんや。だけど今日は沙英くんがいないのがちょっぴり寂しいのは秘密や。

あたしは家でヴィータ達と家でテレビを見てたら急にシャマル、シグナム、ヴィータとザフィーラがデバイスを使い始めたんや。

「ど、どうしたん？急にそないな事して」

「主、どうやら主が闇の書の主とばれた様です。ですからシャマルとザフィーラとご自身のお部屋に」

そう言われ、シャマルがあたしを抱えて、ザフィーラと一緒にあたしの部屋に向かった。

「なぁ、何でバレタラいけないん？」

「えっと……その……「豊倉！？」ッ！？ザフィーラ先行って」

沙英くん？沙英くんがどうしたの？

「シャマル！！沙英くんに何があったの！？」

「ごめんなさい。なにも分からないです。今はシグナム達に任せましょう」

うぅ、沙英くん……

何があったんや。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

シグナムＳＩＤＥ

主がお部屋に行ったら、私は侵入者のいる庭へとヴィータと共に向かった。そこにいたのは我らと共に蒐集をしている友人……

「豊倉！？」

が、傷だらけで倒れていた。
ここで倒れていた所を見ると、命からがら逃げ切ったのだろう。
だが、しかし、一体誰にやられたんだ？？
まぁ、今は考えても仕方ない、今はシャマルの回復を待つしか無いのか……

第十二話にして、大怪我の様です（後書き）

仮面の男達の魔法は完全なオリジナルです。
あまり気にしないで下さるとありがたいです。
感想等下さると嬉しいです。

第十三話にして、バレる様です（前書き）

遅くなって申し訳無いです。

本当は昨日にあげたかったのですが、眠かったです。

それではどうぞ。

第十三話にして、バレる様です

シグナムＳＩＤＥ

「そんな！？誰が沙英をやったってだよ！あいつはあたし達よりも強ーんじゃねぇかよ！！」

確かに、豊倉は私たち闇の書の守護者ヴォルケンリッター達より強いのに何故こんなにまでなったのだ？

これは私たちには分かりかね無い。本人から聞くしかない。早く目が覚め無いか……

沙英ＳＩＤＥ

くっ、奴らに手ひどくヤられたんだっけな。全く意外だ、あんな奴らにこんなにヤられるとは別に慢心した訳ではない。ただ単に俺の実力不足だ。

コンコン

「入ってええか？」

この声ははやてか、いや、全員いるな。

「あぁ、良いぞどうぞ」

やはり皆いたか。まぁ考えられるのは俺が何故こんな事になったのかって言う事しか無いな。

「どうした皆揃いも揃って、全員なんて」

「惚けないでほしいな。何故あんなにボロボロになったのか教えて貰おうか」

こえー、何でそんなに睨んでるんですか？
マジでやめて、堤防が決壊しちゃいそうです……まぁしないけどね。

「別にちょっと戦闘をしただけだよ。まぁ、あんなになっても勝ったけどな」

「そんな聞いてるんやないよ。あたし達は何で戦闘をしたんか聞いとるんや」

はやてには本当の事言えないからどうするか。

「それはあれだ、相手がかってに吹っかけて来たからだよ。俺はそれに応えたにすぎない」

「では、その相手とは誰だ？」

え～それ聞く？話しても良いが奴らの目的は俺の排除、闇の書の完成だ。だからこいつ等には関係は無く無いがこれから奴らも関わってくるから言った方が良いのか？う～む、良いか別に。

「確か奴らはシャマルを助けたと言う奴らの容姿にピッタリだったな。仮面を付けた男」

「えっ！？シャマル助けた？シャマルも何か危ない目におうたの？」
「えっ！？いや、別に私はなにもしてないですよ？」
いや、明らかに動揺してるからな？と言うよりそろそろ本当の事言おうか……
「あぁ、その通りだ。俺たちは闇の書の蒐集の際にその仮面の男に出くわしたんだ」
「「「「「なっ！？」」」」」
「それホンマなん？」
「あぁ、そうだ。俺たちがちょっとヤバ目の時に助けてくれたんた」
「豊倉！！なにを言っている！？」
「何って、事実をだが？」
そうだよな。俺は何も間違った事は言っていない。
「シグナム、どう言う事？」
「いっいえ、これは全て豊倉の
戯れ言で」
ふざけんなよ、何で俺に責任転嫁するんだよ。
「シグナム、もう良いんだよ。ここからは本当の事言わなきゃいけ

ないんだよ。はやては闇の書の主だ教えなきゃ失礼だ。はやてにも知る権利がある。いや、教えなきゃいけないんだよ」

「確かにそうだが！！」

いや、もう無理だろ。こんな話を聞いてるんだから。

「沙英君、聞かせてくれるか？今まで家にいない時何をしてたのかを……」

良い目だ。全てを覚悟した目だ。全てを包み込むかの様な綺麗な目に俺も惹かれたのだろう……

「良いだろう。俺等が何をしていたのかを……

……と言う訳だ。分かったか？何故お前に黙っていたのかを」

俺は今までにして来た事を話した。それをはやては黙って聞いていた。

「そうだったん。全部あたしの為に……」

「こいつ等を怒るな、とは言わない。だが、覚えておいて欲しい。お前がこいつ等を思う様にこいつ等もお前の事を思っている事を」

俺はそう言い、部屋を出た。

さてと、体も八割がた治っているし、あとはアスクレピオスの杖で治しますかな。

?俺は夜笠を取り出し魔力を杖に流して治療した。

「よし、こんなものか。……うん。ばっちしだ。調子が良い」

ガチャ

ん?はやて達が部屋から出て来たみたいだな。

「よ。どうなった?これからも続けるのか?」

まぁそんな事、顔を見れば一目瞭然だかな。

「あぁ、これからはお前の事もあるから常に二人一組で動く様にする。シャマルは後方だから基本はこの家を出ない。だからお前はヴィータと共に行動をしろ」

「了解。これからもよろしくな?ヴィータ」

「あぁ」

ヴィータはそっけなく返し、リビングの方へと歩いて行った。

それから数日が過ぎ、俺は今ヴィータと共に無人世界にいます。
理由は単純、蒐集だ。
まぁ、それも終わりこれから帰るとこなんですけどね。

「今回もチャラかったな。手応えなさ過ぎ。もう少し骨があっても良いんじゃ無いかなぁ？」

「はっ！沙英に合わせてたら世界が滅んじまうよ！」

いやはや、手ひどい一言ですな。もう少し言い方と言うものがあるのだろうに。

ＳＩＤＥヴィータ

［シグナム達が？］

［うん。砂漠で交戦中なの。テスタロッサちゃんとその守護獣の子と］

［長引くと面倒だな。助けに行くか］

「ん？おや、敵が来たな。
と言っても別にたいしたもんじゃ無いよ。いつもの相手が来たという訳だ」

何だ？沙英のその声を疑問に思い前を向くとそこには白い魔導士がいた。

「どうやら一人の様だな。それなら俺は大貴のいる方にいかせて貰おう。なに、気にするな。たまたま俺の戦うべき相手が向こう、シグナム達の方にいる。大丈夫。お前なら何とかなる」

「えっ！？ちょっ、待て！」

沙英はあたしの声が聞こえないのか作業を進めた。

「ゴーズ、デュエルディスクモード。魔法カード《マジックカード》『強制転移』発動。んじゃぁな、ヴィータ」

沙英は何処かへと、と言ってもシグナム達の方に転移をしたんだろう。

さて、あたしは高町……何だっけ？まぁいい奴をぶっ飛ばす！
それだけだ。

第十三話にして、バレる様です（後書き）

感想等下さると嬉しいです！！
よろしくお願いします。

第十四話にして、一大事の様です（前書き）

段々執筆スピードが落ちて来た……

難産とはこの事ですかな。

お気に入りが５０件いってました！！

本当に嬉しいです。

これからも宜しくお願いします！

皆さんは何か聴きながらやってるのでしょうか？何か良いのが有ったら教えてくれると嬉しいです。

第十四話にして、一大事の様です

俺が転移をして初めに見たものがシグナムとフェイトが戦っているところだった。

「ようやく来たか。待ったんだぜ？さ、早く構えな。殺るぞ」

俺の後ろから声が聞こえて来た。気のせいかな？やるぞが不吉に聞こえた……

ハァ、やっぱりここに居たのか。どうするかな、こいつとやるのも良いけどシグナムとフェイトの一騎打ちをぶち壊す無粋な奴が居るからな。それに俺ボコられたし。

まぁ、いいか。やりそうになったら俺が介入すりゃぁいいだけか。

「良いぜ。やろうか、青木（あおき）　大貴（ひろき）。貴様の実力を見せてみろ」

俺はゴーズを大剣に戻し後ろを向く。

「はっ！上からの物言いだな！！てめぇのその余裕をぶち壊してやる！！」

俺は大貴に接近した。

「はあぁぁぁ！！」

俺は大剣を振り上げ、振り下ろした。

それを大貴は一歩大きくよけ、こっちに手を向けた。

「アイアングラビレイ！！」

「がっ！？」

いきなり体が重くなり、地面にいや、砂に埋まった。

これは重力！？くっ、体がうまく動かない。どうしたら良いんだ。

答えだ。答えを出すんだ。この状況を打開する答えを！！

「こんなもんじゃぁねぇだろ！！早くこいや！！てめぇの全力を！！」

大貴が手を下げないで反対の手でデバイスの槍を持ち、こちらに走って来た。

そして、ジャンプをして槍を両手で持つ、その時体が軽くなった。

「分かってんだよ。そんな事は！！」

俺は大剣で槍を防いだ。

ピキッ！

やな音がしたと思ったら、俺の大剣にヒビが入った音だ。

「なっ！？」

何故だ？俺の大剣、ゴーズはそこまで作りは粗く無い。強度は強い方だと自負している。

なにせ、シグナム達と死合っても傷一つ付く事は無かったのだから。

「本当にそれが全力かよ！！」

大貴は槍を高速でどんどん突いてくる。俺はそれを全て紙一重で除けて行く。

そして、大貴の猛攻が止む。大きくバックステップで後方に跳ぶ。

「ゴーズ大丈夫か？」

「問題ありません。マスター」

「ゴーズ、休んでくれ」

俺はそう言い、ゴーズの大剣を『夜笠』に入れ、

「投影・開始（トレース・オン）」

俺がそう言ったら、俺の手には一対の剣、白と黒の夫婦剣。

その名を『干将・莫耶』。

俺の魔力は多めにあるらしい。だから俺の武器は無限と言って良いほどにあるのだ。

「行くぜ！」

答えを出す者（アンサートーカー）のおかげで何時、何処に、どうしたら最適なのか分かる。大貴がここまでやる様になるとは思いしなかった。最初は直ぐにやられていたのに……

だが、今は楽しい。それが正直な感想だ。

「なかなか良いじゃねぇか！だか、これはどうかな！！

バベルガグラビドン！！」

先ほどの術より大きな術を繰り出して来た。
デカすぎだろ。くそっ、面倒だな。

「熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）！！！」

俺はそれを対投擲系最強の縦を繰り出す。

ピシッピシッ

七枚の花弁で出来た盾は砕けて行く。

「あ、あれ？やばくね？」

俺は盾が壊れると同時に範囲から出る。

「あぶねぇだろ！！あんなん喰らったらトマトの如くなっちまうだろ！！」

「関係ないね。お前なら除けなれると信じていた」

くっ、こいつは面倒臭いな。やはり接近戦が一番だ。
俺は再び『干将・莫耶』を出現させ大貴に近づく。
そこからは二振りの剣と槍の打ち合いが始まった。

剣と槍で打ち合っていると大貴が驚愕した顔をしていた。
その時、俺の胸から腕が生えていたのに気付く。

「ガッ！！な、なんだと……？」

俺は後ろを向く。そこには仮面を付けた男が立っていた。どうやら熱中しすぎた様だな。こんな奴の接近を気付かないとは。
どうやら先日の件を根に持ちフェイトでは無く、俺を襲った様だな。奇襲とは面白い、やってくれたな。だが、俺とてそう簡単にはやられん！！

「ふんっ！！」

仮面を付けた男が力をいれたのか急に胸に痛みが走る。

「うぐっ！！うぅっ！あぁぁぁぁ！！」

体からどんどん力が抜けて行くのが分かる。
苦しい。

ダメだ。結局俺の実力なんてこんな物なのか？

いや、違う。誓ったじゃないか。俺ははやての為に強くなると！

「ぐおっ。くっぅぅ。邪魔だボケぇぇ！！」

俺は胸から生えている腕を断っ切る。

が、それを感知したかの様に腕が消える。

どうやら抜いた様だ。

「くっ！ダメだ……もう……無理……」

俺は倒れ、意識を手放した。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

大貴ＳＩＤＥ

突然だった。いきなりの事で俺は何も反応出来なかった。

そして、沙英の胸が仮面の男に貫かれた。

俺は何も出来ない。何も……

何も出来ない自分に腹が立つ。

フェイトとイチャイチャしながら稽古をしていた自分が。沙英を見ていれば分かる。いつ、この世界に来たのかは知らないけど沙英は全力で血反吐が出るくらいにシグナム達と稽古をしたのか分かる。

そんな事を考えていると沙英は手に持った剣で胸から生えている腕を切ろうとした。
だが、それは出来ずに空を切る。

その後、シグナム達が来たが俺は謝る事しか出来なかった……

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

シグナムＳＩＤＥ

あの砂漠から帰って来たら先ずは豊倉を布団に寝かせリビングに我々ヴォルケンリッターが集まった。

「いったい、奴は何者何だ」

「あの人は闇の書の完成を望んでいるのじゃないのかしら？」

「それなのに何で沙英も攻撃されなきゃいけないんだよ！！」

そう。そこが問題だ。何故蒐集をしている沙英までもが攻撃されなければいけないのだ？
私たちがその事について話していると

ガシャンッ！！！

大きく何かが倒れる音がした。豊倉は未だに目を覚まさない状況にある。つまり、必然的に主はやての身に何かあったのでは無いかと言う風になる。

「はやて！！！」

誰かが言った。ヴィータか、シャマルか、ザフィーラか、はたまた私か。
とにかく主はやての元に急ごう。

主はやては倒れていて、救急車で病院に運ぶ。そして、主治医の石田先生の話を聞くと麻痺が足から昇って心臓に達しようとしているらしい。
豊倉とテスタロッサを蒐集したのだが今までは間に合うと思って主のそばに居たのがダメだったのか早く集めなければいけない様だ。
豊倉があの様な状態になってしまったのに加え、主の入院。早くしなくてわな。

SIDE OUT

第十四話にして、一大事の様です（後書き）

今回の戦闘はあまり戦闘とは呼べないですね。すいません。

評価、感想を下さると嬉しいです。

明日、と言うより今日で一学期は終わりです！！

執筆スピード上がると良いな……

第十五話にして、協力してもらう様です（前書き）

遅くなって申し訳ないです。

言い訳させて貰うなら、部活で帰って来たら飯食って疲れて寝る。
と言うのを繰り返して執筆に時間を取れないからでしょうかね。
まぁ、部活と言ってもたいしてして無いですけどね。

まぁ、これが一番なんですけど、時オカをやってました。
あ、因みに３ＤＳではなく、６４です。

第十五話にして、協力してもらう様です

俺が気が付いた時はもう夜になっていた。

この部屋ははやての家に泊まる時に使っていた部屋だ。

「くそっ、あの野郎ども、調子こいた事してくれるじゃねぇか。この借りはぜってぇ返す！！」

俺はそう心に誓いながらリビングに向かった。

リビングに着いたら、ヴォルケンリッター達、シグナム達が重い空気を出しながら揃っていた。

「よぉ、どうしたんだ？そんな辛気臭い顔をして」

皆さんこちらを向くと特別天然記念物を見たかの様な驚いた感じで、こちらを向いた。

「豊倉！！お前もう起きて大丈夫なのか！？」

「沙英！！大丈夫か！？」

「沙英君！！まだ起きちゃダメよ！！」

と、心配してくれる。とても嬉しいが一つ不満を言わせて貰うならザフィーラよ、何で何も言ってくれない？いくらお前が無口でもこう言う時は心配をしてくれる素振りだけでも嬉しい物なんだぜ？

「あぁ、大丈夫だ。心配かけたな。すまない。
それよりはやては？」
「主は……」
あぁ、今日だったのか、はやての入院は……
シグナムは俺に俺が仮面の男にリンカーコアを取られてからの経緯を聞いた。
「そうか……はやてが……」
流石にキツイな、はやてがもう少しで危ない何て……
「なぁ、一つ相談がある」
「何だ？言ってみろ」
俺は一つの掛けに出る。
「高町なのは達に協力してもらわないか？」
「「「「なっ！？」」」」
「豊倉！！どう言う意味だ！？奴らは敵なんだぞ！？」
「そんな事は知っている。だからこそだ」

「訳が分からん。それじゃぁ、豊倉は私達を裏切ると言うのか？」

「違う。そうじゃない。簡単に言うと、仮面の男達より身分がはっきりしていて、奴らは闇の書の蒐集を止めようとして、主を捕まえようとしている」

「その通りなんだぞ？主が捕まったら、我らが今までやって来た事は無駄になり、主は……」

重いな。まぁ、それもそうか。これが失敗したら時間が無くなりはやては……

「だから、仮面の男達は目的が分からない以上、奴らと関わるのは危険だから、目的の分かっている奴らと協力をして貰う」

「あたしは反対だぞ！！もう少しで闇の書が完成するんだ！！それなのにそんな事をしてらんねぇよ！」

「我もヴィータに同意する。あと少しで完成なのだ。協力してもらう必要は無い」

「私も反対だわ。ザフィーラが言った様にもう少しで完成するのだからわざわざ敵地に飛び込む必要はないわ」

むぅ、皆意思が堅いな。まぁ、もう少しで完成するんだから仕方ないな。

「いや、私は豊倉に掛けてみる」

えっ！？マジで？

「なっ！？シグナム！！本気で言ってんのか！？」

「私は本気だ。私達ではそんなに良い案が出た訳では無い。それにヴィータ、お前も疑問を持っていたでは無いのか？これで良いのかと」

「確かにそうだけど……」

「うん。いいんじゃないかしら。これでダメなら私達だけでやればいい事だし。それなら沙英君に掛けてみるべきだと思うわ」

「ザフィーラもいいか？」

「我らの将がそれでいいと言うのであれば我は異論は無い」

「皆。ありがとう」

皆からそれ程信頼されているのならばそれに応えねばな。

「さて、俺はリンカーコア取られて魔力を使えないから久々に学校でも行ってくるから帰るは。
じゃぁな」

「聖祥学園よ！私はかえっぶべらっ！！？」

ネタに走ったと思ったら急に頭部に衝撃が走った。

「ぬおぉぉ！！！」

「全く、久しぶりに来たと思ったら、なに言ってんのよあんたは」

こ、この声は！！

「アリサ、何しやがる！いてぇだろ！！」

「そりゃそうよ。全力でやってやったんだから」

いや、どや顔で言われても困るんですが。その後ろにはすずかとなのはそれにフェイトと大貴がいた。

「それよりもあんたが休んでる間にまた転校生が来たわよ」

転校生つったらあの二人しか考えられないな。

「あぁ、知っている。名前は
フェイト・テスタロッサに青木大貴
だろ？」

「な、何で知ってるのよ」

「そんなの聞いたからに決まってんだろ。

よ、後ろの四人さん。おはよう」

「おはよ、沙英君！」
「おはよ沙英君」
「おはよ沙英」
「よ」

上からなのは、すずか、フェイト、大貴だ。大貴よ簡単すぎるな。

「んじゃぁ教室に行きますか」

「ちょっとアンタ無視するなーー！！」

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・。

・・・・。

と言う訳で放課後。
授業？そんなもん全部寝てたわ。
まぁ、指されても全て答えてやったがな。

「大貴、なのは、フェイト。ちょっと話がある。来てくれないか？」

「闇の書の事か？」

大貴から念話が来た。
こいつはカンが良いな。

［あぁ、その通りだ。だから着いて来てくれ］

「分かったの。フェイトちゃん。大貴君。行こう！」

「うん。で、何処行く？」

「そうだな。無難に屋上で良いんじゃないか？」

「それで沙英君、話ってなに？」

「それより、先ずはゴーズ頼む」

俺は腕に着いている、ブレスレットの形をしたゴーズに話しかけた。

「了解だ、マスター。

封鎖領域展開」

ゴーズが結界を張り、辺りは青空から暗くなり、夜をになったかと思わせる明るさになった。

「「えっ！？」」

俺の正体を知らなかった、なのはとフェイトは驚き、知っていた大貴は驚いているなのはとフェイトを見て笑をこらえている。

「それじゃ、ゴーズＳＥＴ　ＵＰ」
俺はバリアジャケットを展開した。
「さて、これで大体は話が見えてくるんじゃないか？」
「えっ！？その格好って……」
「その通り、俺はお前等と敵対している闇の書側の人間だ」
「「え！？えぇぇぇぇぇぇ！！？？」」
うおっ！？うっせぇ。
いくら結界張っていても声は小さめにしような？
「えっと、本当に？」
「おいおい、なのはこの格好を見てもなにも信じないのか？」
「いや、そう言う訳じゃ無いけど。今まで謎に包まれてた人がこんな近くにいるとは思わなかったから。それより動いて大丈夫なの！？フェイトちゃんは管理局の方で設備が揃ってたから大丈夫だけど、沙英君達はそんな設備無いんじゃないの？」
「大丈夫だが？別に魔法が使えないだけでこれと言った傷も無いからな」
「それじゃぁ、話ってなに？」

ようやく本題に入れるか。

「頼む！！主を！！はやてを！！助けてくれ！！」

俺は土下座をした。

心からの誠意を見せる為に。

「えっ！？ちょっと、頭上げて。何がなんだか分からないよ。説明してくれなきゃ」

「分かった。

はやては闇の書の主でその呪いにより、あと少しではやては

死ぬ……」

……。

沈黙。

当然か、人が死ぬなんて簡単に受け入れられる物じゃ無いからな。

それも友達ともなれば当然か。

「はやてって八神はやてちゃんの事？」

「そうだ。はやてが闇の書の主だ」

「もしかして、今入院してるのって……」

「頭が回るな、フェイト。その通り。はやてが入院してるのは闇の書の呪いのせいだ。このままなら長くはない。もって今年いっぱい。時間が無いんだ。頼む！！」

「うん。良いよ。ね？フェイトちゃん、大貴君」

「もちろんだよ。友達が死ぬのを黙って見てられないよ」

「俺も同感だ。人が死ぬのを、それを救えるだけの力があるのに黙ってなんかいられるほど図太い神経してないぜ」

こいつ等は……

「ありがとう。みんな……」

「当たり前だよ。友達を助けるんだから」

なのは……

「もっと早く行って欲しかったな？」

フェイト……

「まったく。その言葉をどれほど待ったと思ってんだよ」

大貴……

「ありがとう……」

「うん。それじゃ早速行こうか。アースラに」

へ？大貴さん？何デバイス起動して転移なんてしようとしてんすか？

って、あぁぁぁぁぁぁ！！

クロノＳＩＤＥ

僕はなのはとフェイトと大貴が通っている学校にいきなり結界が張られたのを調査していたところ、アースラに転移の反応があった。

その後結界は消えていたので、大貴がやったのだろう。

さて、少し話をするとしよう。

沙英ＳＩＤＥ

うへー、来ちまったよ。

少々強引過ぎやしないか？まぁ、もうどうでもいいけどな、来ちま

ったんだ覚悟を決めなきゃな。

「なのは！フェイト！大貴！」

お？誰か来たようだな。

「ん？よぉ！クロノ！どうしたんだ？そんなに急いで」

「いや、ちょっと気になる事があってｎ……

あ～、どう言う意味だ？なぜその子がいる？」

クロノか……おおかた、さっきの結界について聞きに来たのだろう。

「やっぱり知らない奴が来ちゃまずいか？」

？

「いや、思い切り知ってるんだが、それも一番会いたかったのだが……なのは、フェイト、大貴、この子は本当に闇の書の主なのか？」

「いや、主じゃないぜ？こいつは協力者だ」

「はぁ、まぁいい。それよりも連れて来たと言う事は捕まえたか、取引があるのじゃないか？」

「ゴーズ、モードリリース。

さて、本題だが、頼みがあってここに連れて来てもらった」

俺はなのは達にしたように両膝を着き、クロノを見上げた。

「ど、どうしたんだ？改まって」

「頼む！！我らの主を救ってくれ！！」

これでもかと言うくらい頭を下げた。

「ど、どうしたんだ？急に改まって。それに主を救ってくれって」

俺はその後、今のはやての状況を説明した。

「それが本当なら早くなんとかしなきゃな。それに君たちの罪も軽くなりそうだ。だけど僕の一存では決められない。艦長に許可を貰わなくては」

まぁ、あまり心配はしてなかったけどそれを今聞くとちょっと心配して来るな。まぁ、リンディさんなら大丈夫だろう。

「その必要は無いわよ。私がその申し出を拒否なんてしないわ。わざわざ一人でここに来るのだからよほど危険なんでしょう。クロノ、行ってやりなさい。豊倉君と言いましたね。私、時空管理局艦船アースラ艦長、リンディ・ハラオウンは闇の書の守護騎士達に協力します」

「あ、ありがとうございます！！」

良かった。これではやては助かる。

その後、俺はクロノから色々と情報を貰った。普通ならありえない

けど、なのは達の友達ならと教えてくれた。

闇の書の本当の名前は大貴が言っていたが、『夜天の魔導書』と言うらしい。最近になって原作知識が無くなってきたとは言えこれは驚きだ。

その夜天の魔導書は昔の主がプログラムを改変して今の状態の闇の書にしたらしい。

さて、これで準備も整った。後は実行するだけだ。

第十五話にして、協力してもらう様です（後書き）

何かおかしい様な気が……
そんな事を考えながら載せるってダメな気がするが……
感想、アドバイスなどを下さると嬉しいです。

ＰＶ９２０００ユニーク１６００００突破記念　　番外編と言う名のデュエル

とある方からご要望があり、書いて見ました。

難しすぎです。ただでさえ、現実で満足にプレイで来てないのに書いたからでしょう。

プレイングに突っ込ま無いで下さると嬉しいです。

PV92000ユニーク160000突破記念　番外編と言う名のデュエル

と言う訳で書いて見ました。

ガ「いや～見切り発車で来たが何だかんだでこんなに行くんだな。マジびびったわ」

沙「そうだな、お前はもう少し計画性と言う物を覚え様な？」

ガ「了解です。さて、遅くなりましたが、これもひとえに読んでくださっている皆様のおかげです。感謝感激感涙です！！」

沙「俺からもありがとう」

ガ「さて、こんなとこで喋っていても誰も喜ばないんで早速行ってみましょう！！」

沙・ガ「ではどうぞ！！！」

ここは海と山に面した街。海鳴市。そこに人気の喫茶店がある。その名は『翠屋』老若男女問わず人気の店である。そこに今ある男の

子二人が揉めている。

「だから！！これはお前の為に、美由紀さんとシャマルが作ってくれたんだ！！お前が食うべきであって、俺が食うのはおかしいって言ってんだよ！！」

こう言った男子だか、女子だかわからない様な顔したの黒髪と言うより藍色の髪をして椅子に縛り付けられてるのが豊倉沙英（とよくら さえ）。

「俺に作っ貰ったんだ。俺がそれを皆で仲良く分けようっつってんだよ！！」

こう言ったのは黒髪をして椅子に縛り付けられているのが青木大貴（あおき ひろき）。所謂イケメン。

さて、ここでこの二人が何故言い合いをしているのかわかったと思うが簡単に説明しよう。

今日、9月9日は青木大貴の誕生日。そこで先ほど名が上がった、高町美由紀、シャマルが青木大貴の為にケーキを作ってあげた。味見もとい毒味をせずに。

そして、この二人実は転生者でこの世界に生きる前からシャマルの料理の腕を知っていたのだ。つまりシャマルの料理を食う＝死と言う方程式が成り立っているのである。事実、ケーキはこの世の物とは思えない色をしている。

つまりここは何としても食べるのを避けたいのである。

「くそっ、埒があかねぇ！！表に出ろや！！」

「上等じゃボケぇ！！行くぞエルタニン！！」

「二人とも落ち着きぃ」

この状況で声を掛けて来たのは茶髪の女の子。八神（やがみ）はやて。

「これが落ち着いてられるか！！はやてからも何か言ってくれ。そして、俺を開放してくれ！！」

「開放するのは沙英君が落ち着いたらな？それよりもあんた等が暴れたら地球が無くなってまうからここは一つカードゲームで決めるのはどうや？」

そう。この二人転生者だけ有って能力はチート無限大。何処の最終戦争だと言わんばかりの力を持っている。

そんな二人がここで戦えばこの地は更地と化すだろう。

「カードか……良いだろう。やってやろうじゃねぇか」

「ふん！！返り討ちだ！！」

そして、解放された二人は外に出た。

「ほらよ」

豊倉沙英はそう言いデュエルディスクを渡した。

「おぉ。これは良いな。それじゃ、早速！」

「「デュエル！！」」

沙英ＬＰ　４０００
大貴ＬＰ　４０００

「先行は俺が貰うぜ！ドロー！！」

先行は豊倉沙英が行う。

「俺は剣闘獣（グラディアルビースト）ラクエルを召喚！」

ソリッドビジョンと言われる立体映像によりサイの様な角の生えた獣が出てくる。

剣闘獣ラクエル
星４／炎属性／獣戦士族／攻１８００／守　４００

「そして、俺はカードを二枚伏せ、ターンエンド」

豊倉沙英
ＬＰ４０００　　手札残り四枚

「（沙英のデッキは剣闘獣か……）俺のターン、ドロー！
俺はＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）エアーマンを召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン

星４／風属性／戦士族／攻１８００／守　３００

「そして、効果発動。俺はデッキからＥ・ＨＥＲＯ　オーシャンを手札に加える。そして、魔法（マジック）カード融合を発動！！このカードの効果により俺は手札のＥ・ＨＥＲＯオーシャンとＥ・ＨＥＲＯフォレストマンを融合し、来い！Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース
星８／地属性／戦士族／攻２５００／守２０００

「そして、手札から魔法（マジック）カードサイクロンを発動！！このカードの効果により沙英の伏せたカードを一枚破壊。俺が破壊するのは右側のカードだ！」

「はっ、それがどうした。チェーン発動、和睦の使者。この効果によりこのターン俺のモンスターは戦闘に破壊されず、戦闘ダメージを受けない」

青木大貴が破壊しようとしたカードはチェーン発動により意味を無くした。

「チッ、俺はカードを一枚伏せてターンエンド」

青木大貴
ＬＰ　４０００　　手札残り二枚

「俺のターン、ドロー！
俺は魔法カード剣闘訓練所（グラディアルトーレーナー）発動！この効果により俺はデッキから剣闘獣ベストロウリィを手札に加える。そして、モンスターをセット。俺はフィールド上のモンスター二体をデッキに戻す、この時戻すモ

ンスターはラクエル、ベストロウリィを戻す。この事により、エクストラデッキからモンスターを特集召喚する。来い！！剣闘獣ガイザレス！！」

剣闘獣ガイザレス
星６／闇属性／鳥獣族／攻２４００／守１５００

「チッ！厄介なのが来たか……」

「剣闘獣ガイザレスの効果発動。この効果により俺が破壊するのはジ・アースとその伏せカードだ」

「リバースカード、オープン！奈落の落とし穴！！奈落へと消えろ！」

「甘い、甘すぎる、甘々なんだよ！！缶コーヒーのカフェオレにさらに砂糖とガムシロップをぶっかけるぐらい甘いんだよ！！」

「例えの意味が分からん。早くしろ」

「ふっ、リバースカード、オープン。収縮。俺はガイザレスを選択。このカードの効果により、ガイザレスの攻撃力は半分になり、奈落の落とし穴の効果を受けなくなる。俺はカードを一枚伏せてターンエンド」

豊倉沙英
ＬＰ４０００　　手札残り三枚

「俺のターン、ドロー！俺は手札からＥ－エマージェンシーコールを発動。この効果により俺は、二枚目のＥ・ＨＥＲＯ　オーシャン

を手札に加える。さらに！俺は融合を発動！これにより俺はオーシャンとエアーマンを融合。来い！風のヒーロー、Ｅ・ＨＥＲＯＧｒｅａｔＴＯＲＮＡＤＯ！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ
星８／風属性／戦士族／攻２８００／守２２００

「そして！Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯの効果発動。この効果により相手のモンスターの攻撃力、守備力を半分にする。くらえ！タウンバースト！！」

「無駄だ！リバースカード、オープン！剣闘獣の戦車発動！このカードは自分フィールド上に剣闘獣と名のついたモンスターが存在する時発動可能で、相手モンスターの効果を無効にし、破壊する。さぁ、どうする？お前の手札は残り一枚。何ができる？」

「ふっ、俺は魔法カード、貪欲な壺を発動。俺はこれにより、Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン、Ｅ・ＨＥＲＯオーシャン二枚、Ｅ・ＨＥＲＯジ・アース、Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯを選択し、デッキに戻す。そして、カードを二枚ドローする。……ドロー！

……来たぜ！！俺は魔法カード、強欲な壺を発動。俺はカードを二枚ドローする。……ドロー！
ははっ、俺には主人公補正がかかってんのかね。
俺はＥ・ＨＥＲＯエアーマンを召喚。そして、俺は手札にＥ・ＨＥＲＯオーシャンを加える。そして、融合を発動。フィールド上のエアーマンとオーシャンを融合し、来い！風のヒーロー、Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ！！」

「おいおい、マジでチートドローは勘弁してくれよ」

「俺に言われてもな、行くぜ！Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯの効果発動。タウンバースト！！」

剣闘獣ガイザレス
ＡＴＫ２４００→１２００
ＤＦ１５００→７５０

「行くぞ！覚悟しろ、この獣野郎！！Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯの攻撃、スーパーセル！！」

豊倉沙英
ＬＰ４０００→２４００

「チィィ！まだだ！まだ終わってねぇ！」

「俺はさらに、融合解除を発動。これにより、俺はＧｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯをエクストラデッキに戻し、墓地からエアーマンとオーシャンを特殊召喚する！」

「な！？」

「これで終わりだ！！二体でダイレクトアタック！」

「うわぁぁぁぁ！！」

豊倉沙英
ＬＰ２３００→０００

「よっしゃぁ！！んじゃ、約束通り、食べてもら…う…ぞ……」

「ん？どお……」

青木大貴が歯切れが悪いのを変に思い、豊倉沙英は青木大貴の目が自分の後ろから離れないのを理解し後ろを向くと豊倉沙英は言葉を失った。

そこには、悪魔……もとい、高町なのはが目にハイライトを失い、立っていた。

「沙英君？何でお姉ちゃんとシャマルさんが作ったケーキを食べようとしているの？あれは大貴君の為に作った物なのにそれを沙英君が何で？」

「ち、違うんだ。これにはちゃんとした訳があるんだ」

「そんなの関係無いの。沙英君、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか？」

「い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

ズルズルと引き摺られながら叫んで消えていった……

「どうする？俺？」

「大貴君。さ、早く食べてください。早く」

青木大貴の後ろにはこれまでの原因であるシャマルがいた。

ポン

「骨は拾ったる。安心して逝ってこい」

「字が違ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁう！！！」

どうやって字が違うのを理解したのか分からないが、青木大貴はシャマルが作ったケーキを食べさせられた。

後日とある病院の一室には一人は全身打撲、骨折五カ所。

また一人は食中毒。

で入院した二人がいたとかい無いとか。

こんな光景が見えるのはまだ未来の事…………

ＰＶ９２０００ユニーク１６００００突破記念　　番外編と言う名のデュエル

遊戯王のＳＳ書いてる人マジで尊敬し直します。

感想・指摘・アドバイスなどを下さると作者のテンションがおかしくなり、次話が早く更新されるかもです。

まぁ、今はパワプロにハマってるので遅くなると思いますが……

第十六話にして、危機一髪の様です（前書き）

いや、本当にすいませんてました。

言い訳ですが頭の中では出来てたのですが、それを文にできない自分の才能ってやつが無いんです。

それに加え、やる気が・・・やばいです。書く気力がなくなって来ました。

そんな感じです。

後書きにその事も含めて、お願いが有ります。

第十六話にして、危機一髪の様です

クロノから情報を貰って、俺はなのは達と別れた。

そんでもって今は、病院に来ている。と言っても面会時間はとっくに終わっている。

まぁ、そんなの関係ないけどな。

「だけど、どう入れば良いんだ？はやての部屋の位置はわかるから、そこまでが大変だし、この際デバイス起動して浮かんで行くか？……うん。そうしよう。それじゃ、ゴーズＳＥＴ　ＵＰ」

「良いんですか？一般人にばれたら大変ですよ？」

気にするな。問題無い……多分。

「多分とか言っちゃってるじゃ無いですか」

「細かい事は気にすんな。ほれ、早くしてくれ」

「了解です。マスター」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

はやてＳＩＤＥ

今日はなのはちゃん達は来なかった。その代わりにシグナム達が来てくれたんやけど、その中に沙英君が居なかった……

シグナム達に聞くと、なんでもたまには学校に行くとか言って、学校に行ったらしい。あたしが入院する前は、たまに出かける、と言っても数時間で帰ってきたけどそれ以外はいつもあたしと一緒に居てくれた。まぁ、学校をサボってやけど、多分あたしを寂しくさせないようにと思っての行動だと思う。
学校には行って欲しかったけどそれは言えなかった。多分あたしが本当はずっと側に居て欲しかったから、だと思う。

コンコン

不意に、窓ガラスがそんな音をたてた。

まぁ、気のせいやろ。常識的に考えてこんな時間に石が当たるなんて事は無いと思う。
音自体が気のせいや気のせい。

ドンドン

あっれ～、おかしいなぁ、さっきより音が大きなった気がするんやけど

ドンドン

あぁ、気のせいじゃ無かったんね。
はいはい。今開けますよ。

カシャ

「よっ！」

なっ！？な、なんで沙英君がおるんや？と言うか飛んどるし！！

もう、何処から突っ込んでええか分からんわ。

「どうした？そんな鳩がマシンガン喰らった様な顔をして」

「それを言うなら豆鉄砲や」

これを突っ込んでよかっんか分からんな。

「それで？沙英君どうしたん、こんな時間に」

「ん？今日ははやての見舞いに来てなかったからな。来ただけだ」

嬉しいこと言ってくれるやないか。

でもな、そんなんで騙されるほどあたしは沙英君を知らんわけやないんやで？

「建前は分かった。それで？本題は？」

ビクッ

いや～、おもろいなぁ、なんで分かったんやって顔やな。

「どうして、分かった？」

「別に、普段の沙英君はそれだけじゃ来ないな、こんな時間にメン

ドくさい事はしないはずや。おおかた、何か用があって来たんや。どや？あってるやろ？」

「はぁ、なんでそこまで分かるのかね、半年程度で」

「ふふ、一緒にいた時間は関係ないで、関係あるのはいた時間をどう過ごしたかや」

「全く、頼もしいねぇ。俺の友達は。

まぁ、それじゃ、本題といきますか」

沙英君の眼つきが変わった。

真剣な眼に。

「明日、はやての足を治す。いや、闇の書を元に戻す」

え？あたしの足を治す？

闇の書を元に戻す？

「何が言いたいん？闇の書を元に戻すって、無理なんやないの？」

「今日俺がこんな時間に来たのは今まで敵だったら奴らと情報を交換してきたからだ」

「敵と会って来るって、何かあったらどないすんねん。まったく……」

「まぁ、大丈夫だよ。向こうには友達が居るから」

「あたし達って、犯罪者やなかったか？それで友達って」
「気にするな、たいした事じゃない」
たいした事じゃないって……それって結構な問題やないの？
「話を戻すぞ。
そこで俺の友達が言うには闇の書はまだ残ってるらしいんだよ」
「残ってるって何が？」
「えっと、なんて言ったけな。ほら、シグナム達みたいな。人がまだ闇の書に眠っているらしいんだ」
まだ闇の書に残っている？
「そ、それほんまか？」
「あぁ、本当らしいぞ。でもな、それは俺らじゃぁ、起こせないんだ。闇の書の主である、はやてだけしか起こせないんだ」
「あたしだけ？」
「うん。だから明日、俺の友達達と闇の書を元に戻すんだ。任して。俺たちに任してくれれば良いんだよ」
「全部任せへんで、あたしも手伝う。どんな事があろうとも今は闇の書の主はあたしなんだから」
「そうだな。そうだったな。はやての力を借りなきゃ何もできない

もんな」

「せやで、あたしが闇の書の主なんやから」

「うん。さて、それじゃ明日も早いし、寝ようか？」

「むぅ、子供扱いはいけへんで」

「夜更かしは美容に大敵なんだぜ？」

ピクッ

な、なんやて？このピチピチの柔肌をどうしたら、そんな風に感じるのや？いや、眼科を紹介した方がええんか？

「はやて……何考えているのか知らないが、折角のシリアスが一気に崩れ去ったぞ」

「いやいや、気のせいやで。さ、寝よか？」

「いや、なんで俺を誘ってんの？」

なんでって、ホンマに女心の分からへんのや？

「まぁ、まぁ、細かい事は気にせんで、ほら」

「いや、ほらって言われても看護師さんが来たら困るだろ？」

「大丈夫や。朝起きたら隠れてくれれば良いだけやから。問題あらへん」

「問題大ありなのだが、はぁ、どうせ何を言っても聞かないんだろう？」

なんや、分かっとるやないか。まったく、初めからそうしとけばいい物を。

「ほら、早く早く。入った入った」

「まったく。仕方ねぇな」

そんな事をぼやきながら沙英君は布団に入ってきた。

温かい。いつもはヴィータと寝てるからちっちゃい抱き枕代わりやけど、沙英君はヴィータより大きいからなんやろ、お兄ちゃんがいたらこんな風に出来たんやろな。でも、お兄ちゃんじゃあたしはダメなんやけどな。

「おやすみ、はやて」

「おやすみ、沙英君」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

沙英ＳＩＤＥ

「ん、う～ん。うん？」

俺が朝目が覚めたら、俺の目の前にはやてがいる。

あれ？なんでいるの？

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・

「何やっとんの、沙英君？」

「うおっ！？えっと、いや、別に」

「嘘やね。まぁ、おおかた、なんであたしがここにいるんかって聞きたいんやろうけど、ここ、病院やで」

・・・・・は？

「わり、もう一回言ってくれ」

「だーかーらー、あたしが沙英君に一緒に寝てくれって頼んだんや。分かったたか？」

・・・・・あ～ぁ、あったかもそんな事。いや、あったな。うん。

ガチャ

「こんにちは～～」

ん？誰か来たな。この声はなのは？

ピシッ

ブルル

う、うぉぉ。なんだ。何が起こった。イキナリ部屋の温度が氷点下に下回ったぞ。それに悪寒がする。

「ねぇ、沙英君。なんではやてちゃんの布団に入ってるのかな？」

「え？えっと、これはだな」

一緒に寝てたからなんて言ったら危ない気がする。言ったらその瞬間俺の身に何か起こる！！！

「なんや、なのはちゃん。そんなもんみて分からへんのか？一緒に寝てるんやよ。それに、まだ入ってるんは、腰がちょっとな」

ピシッピシッ

やばいやばい。更に寒くなったよ。つーかはやてよ腰がちょっとなって、俺は何もしていないのだが……

「へー沙英君。

Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか」

「ちょっ、なのはさん。眼が怖い。マジで怖い！！はやて、お前があんな事言うからだぞ！！早く誤解をとけ！！」

「誤解？あたしは全部本当の事を言うただけやで」

ブワッ

可笑しい。可笑しいぞ。はやてが喋るごとに部屋の温度が下がっていく。

ガシッ

「さ、逝こうか」

「字が違ぁぁぁぁぁう！！！」

「ドナド～ナ～ドナド～ナ～」

この後、豊倉沙英がボロボロの状態で発見されたとかなんとか。

第十六話にして、危機一髪の様です（後書き）

前書きに書きました通り、お願いが有ります。
と言っても、アンケートですね。

これからの事です。
と言うわけで

?:このままＳＴＳに直行

?:いやいや、ここは別の世界に行こうぜ
この場合は、行って欲しい世界も書いて下さい。

?:キリもいいし、ここで打ち切りにしちゃえ！！

この中でお願いします。他にもあれば言って下さい。
メッセージでも、なんでも良いです。
まぁ、全然こない場合は、どうしよっかな……
その時の気力によりますかね。

では、お願いします。

今更ながらの設定集の様です（前書き）

タイトル通りの内容です。

ＰＶが１２００００ユニークが２１０００超えてました。凄く嬉しいです。

これからも宜しくお願いします。

欲を言えばアンケートに答えて欲しいです。

全体的に抜けてました。すいませんｍ（＿＿）ｍ

今更ながらの設定集の様です

主人公設定

●名前
豊倉(とよくら)
沙英(さえ)

●年齢
１９？９

●性別
男

●容姿
整った顔立ちで、よく見るとかっこいい。パッと見は美人に見え、人により男でも女にも見える。髪は黒で瞳は漆黒。
イメージは『國崎出雲の事情』の皇(すめらぎ)
加賀(かがと)斗

●性格
大人しく、人見知りをあまりし無い。年下の子への面倒見が良い。
甘い物大好きで、買うのは勿論自分でも世界で有名なシェフなんか目ではない位の物を作ってしまう。しかし、なぜか普通の料理が作れない。

●能力
能力創造(スキルサクセサー)

神様に能力を思いつかなかった為に能力を作る能力を貰った。制限としては、４回でこの能力は消える。今のところ二回使用し、残り二回。

神に特別特典として『夜笠』（魔改造品）を貰った。

今のところ、

答えを出す者（アンサートーカー）これは学校の場所が分からず、その場所を知る為にこの能力を作った《付けた？》

Ｆａｔｅ／　シリーズの能力全て。

これは武器の宝具は夜笠で出せるが能力系は使えないが、これで使える様になった。これはＯＮ／ＯＦＦ可で、十二の試練（ゴットハンド）など常時発動型でもＯＦＦに出来る。つまり、自分の欲しい時に欲しい能力が手に入る。

●魔力量
ＡＡ＋

デバイス
●名前
　　ゴーズ

待機状態はブレスレット

●種類
アームドデバイス

●武器形態
大剣

ＢＪは遊戯王の冥府の使者ゴーズ。

このデバイスは特殊能力？があり、第二形態がデュエルディスクになり、好きなカードを使える様になる。

※基本はＯＣＧ効果ですが場合により、自己流にアレンジし使用する場合があります。

オリキャラ

●名前
青木（あおき）
大貴（ひろき）

●性別
男

●容姿
顔は所謂イケメン。十人中九人はイケメンと言う。
黒髪（さらさら）を肩ぐらいまで伸ばしている。瞳は沙英同様に黒。
イメージは『國崎出雲の事情』の松田（まつだ）
梅木（うめき）

●性格
基本はノリの良いバカ。
仲間意識が高く仲間と意識したやつがが傷付くと切れる良いやつ。
前世でも現世でも豊倉沙英と親友。

●能力
一方通行の能力
金色のガッシュベルのクリアとシンの術以外の全て。

●魔力量
S＋

デバイス
●名前
エルタニン

●待機状態
ネックレス

●種類
アームドデバイス

●武器形態
槍
イメージは新世紀エヴァンゲリオンの聖なる槍。

ＢＪはＢＡＳＡＲＡの真田幸村。

今更ながらの設定集の様です（後書き）

前回のアンケートは来る気配がないですね。
うん。悲しいです。
一応、お二方から来ましたので、ＳＴＳに行きます。
一応まだ仮なので、アンケート頂けたら嬉しいです。

第十七話にして、絶望を感じる様です（前書き）

本当にすいませんでした！！！

言い訳はしません。

ただ、一言言わせてもらうなら、文才が欲しいです。

あと、第十二話でスターダストを取り込む時のセリフを変えました。

あれだと普通に呼び出す事が出来ないので。

語っても誰得なので、どうぞ。

第十七話にして、絶望を感じる様です

皆さん、こんにちは。豊倉沙英です。今俺ら闇の書側は管理局の人間と俺が仮面の野郎、猫どもにリンカーコアを蒐集された無人世界に来ている。

この世界に来たのは大貴の提案だ。確かに原作では暴走とは言え、被害が出てたからな。

　そんなこんなでこの世界に来た。なのはが朝はやての病室に来たのはその為だそうだ。何故あんなに早く来たのか聞いたところ

「何だか変な勘が働いたの」

だ、そうです。何だよ変な勘って、あの後、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩされた俺は夜笠からアスクレピオスの杖を取り出し治療した。大貴の時は一分も掛からなかったのに何故か三分も掛かった。

そんな事は置いといて、今はやては大貴から管制人格の事を聞いている。まぁ、管制人格については俺が教えているので名前を考えているとか言っていたな。

「さて、クロノ悪いが頼むぞ」

「まぁ、これも終わらせる為だからな。やってくれ」

うん？どうやら残りのページをクロノで補うらしい。てっきりここの原住生物から摂ると思っていたんだが。それはめんどくさいな、

戦っても疲れてこの後の闇の書の闇を倒すのに時間が掛かるな。
シャマルが闇の書を持ち、クロノのリンカーコアを蒐集した。
そこからは、はやてが闇の書に飲み込まれ、管理者権限で闇の書と防衛プログラムを切り離しをした。後は今ちょっと離れたところにある切り離された防衛プログラムをぶっ飛ばせばお終いだ。理性を失った力の塊は獣だ。獣は本能の赴く儘に破壊を繰り返す。
『みんな！！向こうにある黒い淀みが防衛プログラムだよ。後五分で暴走が始まるよ。あれをどうにするかは皆で決めて』
エイミィさんがこっちに丸投げして来た。まぁ、確かに幾ら管理外世界の無人世界だからってアルカンシェルを打つわけにもいかない、かと言ってデュランダルか何かで永久凍結する事も出来ない。ならばどうすれば良いか……そんなの簡単だ。原作通りにフルボッコにし、アルカンシェルのある宇宙空間に転移させアルカンシェルをブッパすれば良いだけだ。
俺と大貴の目が合った。どうやら同じ考えのようだ。
それを俺は皆に話した。
「全く。よく君はそんな事思いつくな。普通は無理だぞ」
クロノが呆れながら言ってくる。
「イヤイヤ、そこは思考が柔軟とでも言ってくれ。
まぁ良い。みんな聞いたな、これで闇の書も終わる。派手にかましてくれ！！」

「送迎会じゃ無いんだぞ……」

『実現可能だし、そのプランで行くよ。みんな！来るよ！！』

クロノの発言をエイミィさんが遮る。

黒い淀みの中から出て来たのは化け物としか言いようが無い生物だ。それはゲームなんかで良く見かけるキメラみたいに色々な生物が組み合わさった生物がいた。

「さて、話した通りに頼むぞ！」

後はヴィータ、なのは、シグナム、フェイトの順で技を放った。

『みんな！大変だよ！！フェイトちゃんが最後のシールドを破壊したんだけど、新しいシールドが張られたの。どんな効果があるのか分からないから気を付けて！』

おかしい。ここで新たにシールドが張られる事は無かったはずだ。

「それじゃ、ここは俺がやる！行くぞ、ゴーズ！！デュエルディスク」

俺の持っていた大剣は遊戯王のデュエルディスクになった。

「目には目を！って事で闇属性モンスターで行くぜ！！
漆黒の力！大いなる翼に宿りて、神風（しんぷう）を巻き起こせ！吹き荒べ、BFーアームズ・ウィング」

俺の隣に現れたのは長い銃剣を持った黒い羽、赤い髪をした鳥人だ

った。

「行け！アームズウィング、ブラック・チャージ！！」

アームズウィングはその手に持った銃剣から弾を放ち、防衛プログラムに攻撃して行く。

が、その放った銃弾はアームズウィングにと帰って来た。

は？帰ってきた？おかしいだろ、アームズウィングには貫通効果があるのだからそのバリアすら貫通する筈。なのに、何故？

パァァァン

帰って来た銃弾をよける事無く、アームズウィングが破壊された。俺にダメージがこないって事は同士討ちになったって事だ。

流石にノーリスクであんなに強力なモンスター達を呼べるわけが無い。普通の召喚獣同様に呼び出せるが、戦闘で負けると俺にダメージが帰ってくるのだ。つまり、モンスター達は同等か、それ以下の

相手にしかさせられ無いのだ。
それよりもこのバリアはあれだよな。
「大貴！このバリアは！！」
「あぁ、俺の能力だな。多分、リンカーコアを蒐集した時に取られたのだろう。全く、厄介すぎるぞ。沙英、俺にもやらせろ」
「勿論だ。俺があのバリアを突破する。お前はその隙にデカイのをやってくれ。頼んだぞ」
「了解だ。さぁ、行くぞ沙英！！」
こいつテンションが上がっているな。まぁ、俺もだが。今までずっと敵どうしで一緒にする事が出来なかったんだからな。上がらない方がおかしいだろ。
「行くぞ大貴！！ちゃんと合わせろよ！！王の財宝（ゲートオブ・バビロン）！！」
俺は最初に大貴と戦った時に使った破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）とその原点の槍を出して両手に持った。
俺は先ほどだした槍を両手に持って防衛プログラムへと向かった。
それにしても防衛プログラムってデカくね？俺の何倍もあるぞ。
そんな事より俺は両手に持った槍を防衛プログラムへと向かって投げ付けた。
それはさっきのアームズウィングみたく戻って来る事無く刺さった。

「頼んだぞ、大貴！！」

「全く、本当はもっと大技を使いたいがこれで我慢してくれよ？

ニューボルツ・マ・グラビレイ！！！！」

この術はブラックホールのような桁外れに強力な重力場を敵の体の近くに作り出し相手を押しつぶす術だ。

つまり、何が言いたいかと言うと、退散！！

この術の範囲からは土煙がたった。

「大貴！！あんな強力な術使うなら最初っから言ってくれよ。危なかったぞ」

「はは、わりぃわりぃ。お前なら逃げ切れると思ってな」

「たくっ、それじゃ、みんな後は頼む！！」

『『『やり過ぎだ！！』』』

何故？俺が怒られなきゃいけないのだ？全部大貴がやったのに。俺はそれを補助しただけじゃ無いか。

「はぁ、全く、沙英君は……シャマル、後は頼んだで」

何故？はやても俺を呆れた様な目で見てくるの？

『みんな！大変だよ！！闇の書の防衛プログラムの反応は消えたんだけどそこから生体反応がするの。多分、最後に何か召喚して行ったみたい。気を付けて！！』

おいおい、さっきは大貴の能力だった事を考えると今度は俺の能力が妥当か。いや、奴は何か召喚して行ったのだろう。しかも、その溜まりに溜まった魔力を使い切る程のモンスターを。

煙が晴れるととそこにいたのは禍々しい魔力を放つ一対の翼が生え、胴は細長くトカゲの尻尾の様な形状をしたドラゴンが居た。

俺はこの世界に来て始めて絶望を感じた。

俺の予測が正しければ、あれは……

「ゴーズ、あれはまさか……」

「はい。マスターの予想は当たって居ます。あれは……

邪神イレイザーです」

神が降臨した瞬間だ。

第十七話にして、絶望を感じる様です（後書き）

なんか急展回過ぎですが、原作通りなのでカットしました。

最後のイレイザーは最初はアバターにしようとしたのですが、あれ？倒せなくね？的になり、イレイザーにしました。

感想などを頂けると嬉しいです。

第十八話にして、二体目の神の様です（前書き）

何かネタバレなサブタイトル……

すいません。思いつきませんでした。

では、どうぞ……

第十八話にして、二体目の神の様です

「な、何だあれは！？」

誰が言ったか分からない。みんなが言ったのか、俺が言ったのか。ただ一つ言えるのは全員がそう思った。

「大貴、ヤバイぜ。ありゃぁ、お前の”反射”でも勝てねーよ」

「そんな事分かってんだよ。全く、闇の書も粋な事やってくれるぜ。神なんか召喚しやがって。こっちの身にもなってみろよ」

大貴が軽口を叩くが明らかに顔は絶望の色に染まっている。当たり前だ。神を倒せるのは神のみだ。それもその神以上のな。しかし、不幸中の幸いとはこう言う事を言うのだろう。あれが神の中でも一番低いイレイザーで良かった。アバターでも出されたらそれこそ絶望して居た所だよ。今はまだ召喚されたばかりで体が上手く動かないのか、体を解す様に動かしている。後二分ほどで動き始めるな。

「大貴、みんなを連れてアースラに戻ってくれ無いか？」

「なっ！？何を言うとるんや！！みんなでさっきみたいにやれば出来るやろ！！」

はやてが俺が含まれていないのに疑問に感じ、叫んでくる。

だが、イレイザーの効果がある限り、そんな仲良しゴッコ出来ない。

「ダメだ。あいつの前では人がいればいる程力を増す。人の恐怖を糧にする。神の御前には多くの者は立ってはいけないのだよ」

「すまないが、何故豊倉は奴の情報を知っているのだ？」

はやての方から聞こえて来た。しかし、はやての方にははやて以外いない。

「あぁ、済まない。私は闇の書の管制人格だった者だよ。今はリインフォースと言う名を主に頂いた。所謂ユニゾンデバイスと言う者で今は主の中だ」

「あぁ、なるほど。俺が何故あれを知っているかと言う質問だったな。あれは俺が使っているカードで神の存在だ。そして、神は神しか倒せない。それに奴は相手が居ればいる程力を増す。……分かったか？」

「そんなんカードの話なんやろ！？それなら全員で攻撃を仕掛ければ良いやないか！？まだ動き始めてないんやし。そっちの方が効率的や！！」

みんな同じ意見なのか俺を見つめて来る。ただ一人を除いて。

「いーや、そうは問屋が降ろさないんだよ。残念ながらこのカードと言うのが実は異世界のカードでな。その世界を破滅に導いたのが三体居たが、奴はその内の一体だ。そして、沙英が使っているのはそのモンスター達を封印したカードとでも思ってくれ」

大貴が俺をフォローした。

「それでは、沙英が所持して居るのはロストロギアなのでは？」

「あぁ、残念ながらこのカードはこの世界のカードでは無い。違う世界だ。と言っても、並行世界だから探しても無いからな。ロストロギアでは無いぞ」

大貴が俺の変わりにベラベラと喋って行く。

「疑問がまだあると思うが、もう時間だ。『強制転移』」

俺はみんなをアースラへと転移させた。

「フィールド魔法、『天空の聖域』発動」

辺りは雲に覆われ、デカデカと石造りの神殿が現れた。

「全く、何ですかこの展開。オリ主見たいじゃ無いか。こう言うのは俺には似合わないっての。こんなの大貴に任せておけば良いんだよ」

「オイオイ、それはチトひでーんじゃねぇの？」

「いやいや、そんな事ねぇよ。こう言うのは俺のキャラじゃねぇもん。奴の方が似合ってんだよ」

「そうでもねーよ。お前も充分似合ってるよ」

「はいはい。お褒め頂きこう…え…い…で…す？」

あれ？何故会話が成立してんだ？独り言の筈が。

ギ、ギギギ

俺の首がそんな錆びたブリキみたいな音を出したかと思うほどぎこちなく後ろを向くと……

「よっ！」

俺の親友が居た。

「な、何で！？何でお前いんの！？」

「いや、少しは力になろと思って。ほら、俺のデバイス知っているだろ？」

確かにこいつのデバイスは聖遺物のロンギヌスだが……

「別に倒そうなんて思っちゃいねぇよ。時間稼ぎだ。神を呼ぼうにも時間がかかるだろ？」

ギャォォォォ！！！！！

どうやらもう、時間が無い様だな。

「ったく。仕方ねぇな。

死ぬんじゃねぇぞ」

「はっ！！誰に言ってると思ってんだよ！！」

大貴はそう言い。イレイザーの方へと飛んで行った。

「さて、ゴーズよ神なんて巫山戯たもんを召喚するぞ。出来るか知らないが……」

「マスターなら出来ますよ。皆さんの為にやりましょう」

全く、このデバイスは……まぁ、俺たちがやらなきゃいけないのだがな。

「さぁ、ゴーズ行くぞ！」

「青眼の白龍召喚（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）」

俺は神への生け贄の青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）を三体召喚した。

「そして、三体を生け贄に『ラーの翼神竜』を召喚」
その場に洗われた神は邪神イレイザーとは違い、禍々しいオーラを放たず神々しさを放っていた。
「と、見とれてる場合じゃ無い。
■■■■■■■■」
俺は神を使役する為に古代神官文字（ヒエラティック）を唱えて行く。
ＳＩＤＥ　ＯＵＴ
はやてＳＩＤＥ
あたし達が沙英君に転移されてみんなあの場を離れられての安心感と沙英君の所為とは言え罪悪感のある表情をして居る。
「なぁ、みんなで助けにいかへん？」
私はみんなが思っている事を口にした。
「主、それは無駄です。彼、豊倉はあれを神と言っていました。それに対抗出来るのも自分だけであると」
「確かにそうかもしれへんけど、沙英君と大貴君が危ない目に合っとると言うんにジッとなんかしてられへんやろ！！」
あたしは自分の無力が悲しく声を荒げてしまう。

「あそこに行くのは無理だよ」

この船の艦長の所に報告に行っていたクロノ君が言う。

「何でや？」

「大貴達が居るあそこにはこちらからの接触を一切遮断をする結界が張られた。こちらからは中の様子を確認する事は疎か連絡をする事すら出来ない」

「なっ！？な、何でそんなのが？」

「恐らく、沙英が僕達をこっちに転移させた後に周りに被害を出さない様に張ったのだろう」

「てことは、あたし等は何も出来へんのか？」

「そう言うことになる。今は大貴達を信じるしか無い」

ま、またあたしは待つ事しかできへんのか……

沙英君、無事に戻って来てな。

ＳＩＤＥ　　ＯＵＴ

第十八話にして、二体目の神の様です（後書き）

何となく、サブタイトルで分かった方が多勢いると思います。再びすいませんでした。

ラーの翼神竜って召喚してからの古代神官文字を唱えるのでしたよね？

間違えていたら、報告をして下さると嬉しいです。

第十九話にして、決戦終了のようです。（前書き）

久々にこんなに早く投稿出来た！！

まぁ、理由があるんですけど。

それが、自分は陸上部に入っていて、大会が昨日あったんですけど、自分が終わったら暇で暇で、しょうが無かったんですけど、その暇な時間にやっていたらできちゃいました。

と言うわけで、どうぞ。

第十九話にして、決戦終了のようです。

大貴ＳＩＤＥ

もう、何度目になるか分からない位の攻撃を除ける。

体には結構な数の傷が出来て居るが致命傷と行くまでの傷は無い。

イレイザーには少しずつだが傷がついてきた。一度術を放ったのだが、全くの無傷で煙からでて来るとは思わなかった。

そんなこんなで、槍で攻撃を繰り返している。

「ハァ……ハァ……エルタニン、行くぞ。真名開放！！聖人殺しの槍（ロンギヌス）！！」

俺がそう叫ぶと、今まで捻じれていただけの槍はその姿を二又の槍へと姿を変えた。

デバイスなのに宝具？と思うかもしれ無いがこれは神に頼んでいれて貰った物だ。デバイスの名前がエルタニンなのはロンギヌスだと相手にどんな武器なのか分かってしまうからだ。

別にこの武器自体には沙英が使う破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）のような能力は無いが真名開放をすると所有者は能力が大幅に上昇する。そして、神格が与えられる。

つまり、何が言いたいかと言うと、今まではロンギヌスの神格のお陰でイレイザーに傷を付けられたがこれからは俺の放つ技が神から

の攻撃になり、さっきは効かなかった術が効く事になる。

「今までの様にはいかねぇんだよ！喰らえ！

ウィー・ムー・ウォー・ジンガムル・ディオボロス！！」

この術はトゲだらけの巨大な球状のエネルギー弾を放つ術だ。

まっすぐにイレイザーへと向かった。これをイレイザーは全く避ける気配がなくイレイザーの周り一帯は煙がたった。

「殺ったか？」

「一応当たったが分からんぞ」

こいつの能力は良いのだが、もう少しこいつは言葉遣いを直して貰いたいな。

ギャォォォォ！！！！

突如煙が払われた。どうやら奴が翼で風を起こし、煙をはらったようだ。そこにいたのは全くの無傷で佇んでいるイレイザーだった。何故？と言う言葉が頭を支配して行くと同時に恐怖で体中が固まっていく。そして、こちらを見ると口を開き黒いナニカが溜まっていくのが分かる、それを奴はこちらに放って来た。

「マスター！！」

エルタニンの言葉にハッ！となり恐怖で固まった体を無理やり動かして何とか避ける事が出来た。

ズドォォォオン！！

そんな何かが沈む様な音がした。その音がした後ろを向くとそれまであった石造りの神殿はもう無くなっていた。
どうやら奴は手加減をしていた様だ。もうお遊びの時間は終わりと言う事か……

ガタガタと体が震える。だが、沙英の方を見るとまだ終わってないのかまだ何かをやっている。その隣には太陽神がいた。
となるともう少しか。

「エルタニン、もう少しだ。もう少しで沙英が来るぞ。それまでの間、いけるか？」

「フッ、愚問だなマスター。我らならば時間をかせぐドコロか倒せるぞ」

「はは、強気だな。行くぞ、エルタニン！！」

「了解だマスター」

俺は恐怖で氷ついた体に希望と言う光が俺を温めてくれた。
しかし、なんだ、エルタニンも中々良い事を言うじゃないか。

「聖人殺しの槍（ロンギヌス）！！もう一度俺に力をかせ！！」

俺はイレイザーへと向かい、槍を振るう。奴は尻尾などで応戦し、時々先ほどのブレスを放つ。その繰り返しが何分か続いた。俺は奴の左胸が空いたので仕留めようとロンギヌスを振りかぶり放つが翼をうまくたたみ翼にある棘がロンギヌスを防ぐ。

「なっ！？」

俺はあの一撃で仕留めようと放ったので力を入れ過ぎた為今度は俺にすきが出来る。
そこに奴はブレスを放ってくる。
俺にそれを防ぐ術は無い。

「はは、ここで終わりかよ。もう少し、あいつ等と一緒に居たかったぜ」

「だったら、ずっと一緒にいりゃぁ良いだろう？」

どこからか声が聞こえて来た。長い間聞き慣れた声だ。
俺とブレスの間に何かが入った。俺にはそれが何だか分かった。もちろんそれは――――

「ご苦労様、大貴」

――――沙英だ。

慈愛に満ちた顔を向けてくる。

「けっ、おせぇんだよ」

時間がかかり過ぎた親友に少し毒を吐いてみる。

「うん？そうかな？これでも頑張った方なんだが。まぁ、バトンタッチだ。後は任せろ。

行くぞ、ラーよ」

はは、何だかんだでこいつはタイミングが良いな。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

沙英ＳＩＤＥ

ふ～、ギリギリセーフ。何とか間に合ったぜ。

「ラーよ、融合だ」

俺は残りの魔力をラーに喰わせた。これによりラーの攻撃力は上がる。

今の俺は原作の顔芸が融合した状態になっている。

「全く、何でこんなにも面倒くさいかな？この神様はよ」

「太陽神だからじゃないでしょうか？」

「俺が言いたいのは他の神はここまでじゃ無いのに何でだ？と言いたいんだよ」

「そんな事はどうでも良いですからさっさとイレイザーを倒して下さいよ。貴方を待っている方達だっているんですよ」

「話を逸らされた気もするが、まあ良い。殺るぞ、ラーの翼神竜。
邪神イレイザーに攻撃！！」
ラーは俺と一体となった体でラーは口を開き炎を溜めていく。
「ゴッド・ブレイズ・キャノン！！」
ラーは溜めていた炎をイレイザーへと放った。
それに対抗する為にかイレイザーは口から黒いナニカを放って来た。
確か奴の攻撃名はダイジェスティブ・ブレスだったか……直訳で消化の息……あれだよな。うん。
「何を想像しているか分かりませんが多分、意味は全てを消し去る。とかじゃないんですか？」
イレイザーのブレスとラーのブレスがぶつかり合っている中に緊張感無く喋っている。
それ程こちらは余裕があるのだ。
そんな感じで喋っているとラーのブレスがイレイザーのブレスを破りイレイザーに当たった。
これで、終わりだな。闇の書の闇、防衛プログラムを倒す為に来たと思ったら、こんなにも大物に出会うとは思わなかったぞ。
「沙英！！そこから直ぐに離れろ！！」

俺がこれまでの事を思い返していると大貴が悲痛な叫びを上げた。

「マスター！！大貴さんに従って下さい。早く！！」

何がなんだか分からなかったが、指示に従った。

「分かった。その前に魔法カード《マジックカード》融合解除。戻ってくれ、ラーよ。そして、ありがとう」

これにより俺はラーと一体となっていた体を元に戻し、魔力を回復した。

「強制転移は使え無いから、普通に移動だ」

「強制脱出装置があるでしょう！！」

「いや、そんなのセットしてねぇよ」

俺はイレイザーと戦っていた場所を離れて、大貴の下に行きながら怒鳴ってくるデバイスに穏やかに返していた。

「マスター！！シールド後方に全力で張って下さい！！早く！！」

その言葉を最後に俺は強い衝撃を受け意識を失った。

第十九話にして、決戦終了のようです。（後書き）

実はもう一本出来ているので、うｐしちゃいます。

次回でＡ'ｓ編は終わりです。

第二十話にして、A' s編終了のようです（前書き）

と言うわけで、本日二本目です。

では、どうぞ。

第二十話にして、A' s編終了のようです

「知らない天井だ……」

いや、すまん。何か言わなくちゃいけない気がしたんだ。

俺が目を覚ましたらそこは薬の匂いがする為病院の一室の様だ。

「全く、マスターよ、ようやく目を覚ましたのだな」

「ん？痛たたたたた。

ゴーズ、居たのか？で、俺ってどんだけ寝てたんだ？」

「一日と言ったところか」

一日……以外と寝てたんだな。

それより、何で俺は気を失って怪我して寝てたんだ？一日も。

「なぁ、何で俺はここで寝てたんだ？」

「何でってお前は覚えていないのか！？」

あれ？何で驚かれてんだ？

「はぁ、どこまで覚えているんだ？」

「えーと、確か、お前がシールドを張れって言った所までだな」

「じゃぁ、何で私がシールドを張れと言ったのか分かるか？」

いつに無く、言葉遣いが雑になっている気がする。

「あぁ、それはいまだに疑問だ。何でだ？」

「何でって、イレイザーの効果です。……まさかイレイザーの効果は攻撃力を上げるだけだとお思いですか？」

「えっ！違うの？」

他にイレイザーって効果あったけ？

「はぁ、イレイザーの効果には攻撃力アップの他に破壊されたら全てを道連れにする効果があるんですよ」

ん？道連れにってことは……

「何で俺は死んで無いんだ？」

「それは咄嗟にシールドを張ったのと大貴さんもシールドを張ったお陰で重傷程度で済んだのでしょう」

へぇ大貴も助けてくれたんだ。後でお礼を言わなきゃな。

「でも、俺は今どちらかと言うと軽傷じゃね？」

「この世界には魔法が存在するのですよ？魔法を舐めないで下さい」

それはそれで良いのだが、何か納得がいかない。

「それよりも後はアスクレピオスの杖で治して早く外に出て下さい。リィンフォースさんが大変なんですよ。こちらはちゃんと対策して来たでしょう。意味がなくなりますよ」

「ん。それもそうだな。こっちとしてはもう少し寝て居たかったがそれなら仕方がない」

俺は言われた通りにアスクレピオスの杖を王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）からアスクレピオスの杖を取り出し魔力を流し込み、治療をした。

「さて、バットエンドを回避にしに行きますか」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

大貴ＳＩＤＥ

邪神イレイザーとの戦いが終わり、沙英が自爆に巻き込まれ、大怪我をしたせいで気を失ったらフィールドも解けたので俺は急いで沙英をアースラへと連れて行った。

そこに俺たちを待っていたなのはやフェイトたちが居て、沙英を見て皆言葉を失って顔を青くした。

まぁ、当たり前か。血ダルマに成っていて、なんとなく沙英と分かるぐらいなのだから。

それからはシャマルと俺、沙英の能力が少しだけ残ったリィンフォースが沙英の治療にあたった。
そのかいもあってか沙英は後少し休むだけとなった。

そして、ここに居るのははやて達ヴォルケンリッターとなのは、フェイト、俺。そして、そいつらの目の前には闇の書に残った防衛プログラムの影響でいつ暴走するか分からないと言って消えようとするリィンフォースがいる。リィンフォースが消えるとヴォルケンリッターも消えるのだが、あいつ等ははやての主権限で闇の書から切り離したそうだ。

「本当に行くのか？」

「あぁ、心残りはあるが私が居ては迷惑をかけるのでな」

本当に悔しい。俺はチート能力を神から貰ったのにこんな時に役に立たない。

「では、やってくれ」

「ちょおっっと！それ、待ってくれないか？」

そこに聞こえて来たのはここにいる筈の無い俺の友の声が聞こえた。

「全く、人が寝ている間にこんな重要イベントをやらないでもらいたいね」

『『『なっ！？なんで来てんだよ！！』』』

この場に居る全員の心が一致した瞬間だ。

「治ったからに決まってんだろ？」

いやいや、おかしいだろ。ここに来る前にお前の所に行ったらまだ怪我をしてたんだぞ？

「どうやって治したと言うのだ？」

リィンフォースがここにいるみんなを代表して聞いた。

「んなもん、俺が治したからに決まってんだろ」

アッサリと返して来た。しかし、それでは答えになっていないぞ。沙英よ。

「まぁ、簡単に言うと、俺の無限にある武器の中から治療の出来るのを使ったと言うことだ」

「そ、そうか……」

なんか納得してなさげだな。まぁ、当たり前か。こちらでも治したとはいえ、自分で残りを治したと言うのだから。

「さて、俺がここに来たのは他でも無い。リィンフォース、お前を治す為だ」

「わ、私を治す為？」

「そんな事出来んのか！？」

はやてが余程その言葉を待ち望んで居たのか直ぐに飛びついた。

「勿論だ。出来なきゃ来ていないよ」

ってことは、リィンフォースを助ける事が出来るって事か。

「ほ、ほんまか！？なら、あたしはどんな事でもやるからリィンフォースを助けてくれ！」

「了解だ、我が主よ。我が身に変えても」

頭を下げてはやてにそう言う。

我が身に変えられてもリィンフォースが気を追うからやめてくれ。

「もう、心配したくないからやれる範囲でやってな？」

はやての威圧感のある笑顔にたじろぐ沙英。

「わ、分かった。初めに言っとく、絶対に俺が取り出す物を正面から見るなよ？リィンフォースは目を瞑っててくれ。

王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）」

「あぁ、分かった」

沙英が取り出したのは楯に何かの顔が取り付けられた物だ。

つまり、あの顔を見なければ良いのだな。しかし、あれはまさか……

「真名開放！！魔を取り除く楯（アイギス）！！」

アイギス!?アイギスと言えば女神アテナが父、ゼウスから貰った物で、後にメドゥーサの首をはめたと言う楯の筈。このメドゥーサの首はメドゥーサが死してもなお石化の目が働くと言う。
俺が誰に説明してるかも分からない解説をしていると楯が光、リィンフォースに当たる。
そして、光が収まると何も変わった様子の無いリィンフォースが立っていた。

「ふぅ～流石に疲れたぜ。リィンフォース、もう大丈夫な筈だ」

えっ!?もう終わり!?

「ほ、本当に終わったのか?」

「そんなに信じられないのなら、自分で調べてみたらどうだ?」

「わ、分かった。

……。

ほ、本当だ。防衛プログラムの存在が確認出来ない。闇の書自体にもそんな物初めっから無かったかのように消えている」

おいおい、どんなチート何ですか。それは。

「ふふん。どんなもんだい。
さて、防衛プログラムが存在しなくなったのだから、お前は消える必要が無くなったよな？」

「あぁ、そうだな。

ありがとう。豊倉よ」

笑顔でそう言うリィンフォース。

「べ、別に、俺がやりたくてやっただけだ。気にするな」

顔を真っ赤にし、そっぽを向きツンデレ気味に答える沙英。
まぁ、男であんな顔を向けられたらあぁなっちまうよな。普通。

「まぁ、今回はリィンフォースを救ってくれたんや。許したげなあかんで、なのはちゃん」

「むぅ。分かったの」

「それよりも、さっき豊倉は何をしたのだ？あれはとてもじゃないが普通の楯には見えないぞ。あんな首が付いていて」

「うん？あぁ、アイギスの事な。あれはな、女神アテナ楯でな。アイギスは邪悪、災厄などを取り除くと言われてるだよ」

やはり、こいつは俺よりチートだったか。こんなのが何個もあるんだろ？

『『『この、バグが！！やれるのなら闇の書のページを蒐集する前に使えよ！！』』』

またまた、全員の叫びが一致した瞬間だ。

「な、何で俺が責められなきゃいかんだよ」

仕方ない。助け舟でも出してやるか。

「さ、こんな所にいても風邪を引くだけだ。バグはほっといてとっととアースラに戻ろうぜ」

「えっ！？そこは俺を助けてくれるんじゃ無いの！？しかも何？俺がバグって！？俺がバグならお前だってバグだろ！？」

なんか声が聞こえた気もするけど、気のせいだろう。

「ささ、転移するぞ。俺の周りに集まれ。

それじゃ、エルタニン頼む」

「くくく、了解だ。転移」

俺たちは転移した。

沙英を置いて。

「せめて、病み上がりなんだから丁寧に扱ってくれーーーーーー！！！！！」

そんな叫びがアースラにまで、聞こえた気がした。

つーか、お前は病み上がりと言っても調子は万全の状態なのだから構わねぇだろ？

第二十話にして、A' s編終了のようです（後書き）

そう言えば、何だかんだでやって来たこのｓｓはＰＶが１６０，０００ユニークは
２８，０００お気に入りはもうすぐ百件越えです。まさかここまで読んで貰えるとは思いもしませんでした。
これからも読んで下さると嬉しいです。

ここで一つ御報告が……後五話程度日常をやって、オリジナルをはさんで、ｓｔｓに行きたいと思っているのですが、これが全く思い付いていません。なので、ここで話した通り、オリジナルが終わったら時間が空くかもしれません。
まぁ、その間に考えついたら良いのですが……
あ、ちなみに、ｖｉｖｉｄはなんか思いつきました。ｓｔｓカットしてぇなぁ。なんて思っちゃったりしています。あ、安心して下さい。ちゃんとｓｔｓやりますので。

次回まで楽しみにしていて下さいましたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6075t/

魔法少女リリカルなのは～転生者はどうしても原作に巻き込まれる様です。～

2011年10月3日16時06分発行